伝説のドラゴンストライカー

リス岡さん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

暴漢から女性を庇って命を落とした筈の染岡竜吾は、雷門イレブンが揃ったあの日に目を覚ました。

プロの世界で身につけた経験と技術を武器に、ドラゴンストライカーの超次元サッカーが再び始まる！

目次

プロローグ ―― 1
1．帝国の襲来 ―― 8
2．デスゾーン ―― 23
3．炎のストライカー ―― 34
4．宍戸の悩み ―― 54
5．VS尾刈斗 ―― 73
6．秘伝書 ―― 90

プロローグ

「流石だぜソメオカ！あそこで放ったお前のシュート、完璧だったぜ」
「おいおい、よせよ。アレはお前のパスが良かったから撃てたんだ」
「いいや、アレはお前の手柄だぜ。もっと誇れよソメオカ、謙虚さも過ぎれば嫌味になるぜ」

イタリアの街中を、3人の男が談笑しながら歩いていた。
中でも真ん中を歩く体格のいい男は周囲の視線を引きつけいる。
白いスーツに、焼けた肌。ピンク色の髪をソフトモヒカンに刈り上げ、その見る者を威圧するような強面をサングラスで隠しているその男の名は〝染岡　竜吾〟。
かつて日本でその名を轟かせた『イナズマイレブン』のメンバーであり、今や欧州サッカー界の『ドラゴンストライカー』として活躍している名プレイヤーだ。
「ソメオカ！サイン頂戴！」
「ん？おお、いいぜ」
談笑の最中、目を輝かせながら駆け寄ってきたファンの子供に快く応じる。
とてもカタギとは思えない外見に似合わぬ、このファンサービスの良さも人気の秘訣

である。
「人気者だなソメオカ、嫉妬しちまいそうだぜ」
「悔しかったら俺よりも点を取ってみろ！」
「あ！言ったな！見てろ、今度の試合は俺の活躍を見せてやるぜ！」
「じゃあどっちが活躍するか賭けるか？俺はソメオカに賭けるけど」
談笑しながら目当てのレストランへ向かう途中、染岡はふと足を止めた。
それをチームメイトの２人は不思議そうな顔で振り返る。
「どうしたんだいソメオカ、レストランはあっちだぜ？」
「今、悲鳴が聞こえなかったか？」
神妙な面持ちで辺りを見回す染岡に、チームメイト達は悲鳴？と首を傾げる。
少なくとも隣を歩いていた２人の耳にはそんな物は聞こえていない。
「気の所為じゃないのか？」
「そうか？……いや、確かに聞こえたと思うが……」
その時、近くの路地裏へ続く細道からはっきりと女性の助けを求める声が響いた。
チームメイト２人が顔を見合せていると、染岡は勢いよく走って路地裏へ飛び込んで行く。
「俺も行く！お前は警察を！」

「ああ、分かった！」
呆気に取られていたチームメイト達も、ようやく状況を呑み込めたようで慌てて行動を始めた。

「助けてぇぇ……！」
「へっ、大人しくしていろ！」
ブロンドの女性が、暴漢に肩を捕まれながら泣き叫んでいる。
暴れる女性に苛ついたのか、別の暴漢が懐からナイフを取り出すと女性へ突き付けた。
「暴れると刺し殺すぞ！」
「ひぃっ……！」
薄暗い空間の中で、鈍い光を反射する刃物に女性は身を竦ませる。
下卑た笑みを浮かべる暴漢達は大人しくなった女性へにじり寄った。
その時、何処からともなく勢い良く飛んできたサッカーボールが暴漢の1人を吹き飛ばす。
「な、なんだぁ!?」
壁に叩きつけられ意識を失った仲間と、ぶつかって跳ね返ったサッカーボールを何度

も見比べる暴漢。
ポン、ポンと地面を何度かバウンドしたサッカーボールは、やがて革靴を履いた足によって止められる。
その足の主へ視線を向けた暴漢は思わず怯んでしまった。
「何くだらねぇ事してんだ、お前ら……」
そこに居たのは白いスーツに身を包んだ強面の男、染岡。
どこからどう見てもカタギではない、本格的なマフィアの登場に暴漢は慌てふためく。
「ひっ……ひぃ……!この……」
怯えながらも暴漢が向けた刃を、染岡は冷めた目で眺める。
「ったく……そんなモン持ち出してんじゃねぇ……よっ！」
次の瞬間、暴漢は自分の脳の正常を疑った。
眼前の白スーツのマフィアが姿を消した、と思った瞬間、自分の耳元からマフィアの声が聞こえたからだ。
『疾風ダッシュ』、一気に加速して相手を抜き去るというサッカーのドリブル技である。
それを利用して染岡は一瞬で暴漢の背後へ回り込んだのだ。
「ぐえっ！」

そのまま首筋に衝撃が走り、暴漢の意識が途切れる。
糸の切れた人形のようにその場へ倒れ込む暴漢を見下ろしながら、染岡は先程まで襲われていた女性へ意識を向けた。
「大丈夫かい、アンタ」
「は……はい……ありがとう……」
へたり込む女性へ手を差し伸べ、助け起こす。
怯え切っているものの、女性に怪我が無いことを確認した染岡はホッと安堵の息をつく。
そこへ遅れてやってきた染岡のチームメイトは、女性を助け起こす染岡を見てヒュウと口笛を吹き――――そして次の瞬間、喉が張り裂けんばかりに叫んだ。
「ソメオカ!!後ろだーーーーーーーッ!!!!」
「ん?ぐおっ!?」
振り返った染岡はこちらへ駆け寄ってくる暴漢を視認すると同時に、傍らの女性を突き飛ばす。
ドンッ!と衝撃が染岡の体を揺らす。
この程度の衝撃で倒れる事は無かったが、代わりとして衝撃を受けた腹部がじっとりと熱を持つのを染岡は感じていた。

視線を下ろしてみれば、白いジャケットの腹部にナイフが突き刺さっており、そこから真っ赤なシミが広がっている。
それを目の当たりにした途端、染岡の両足から力が抜けてその場に座り込んでしまった。
「おい！ソメオカ！しっかりしろ！おい!!」
刺した暴漢が逃げ去るのに目もくれず、チームメイトは染岡へ駆け寄る。
深々と突き刺さった刃と鍛えられた腹筋の隙間から真っ赤な血潮がとめどなく溢れている。
ゴボリ、と喉奥から湧き上がってきた物を吐き出せば、地面に赤黒いシミが広がった。
「へ……へへ……下手こいちまったな」
全身の熱が傷口から流れ出していくような感覚を覚えながら、染岡は力無く呟く。
チームメイトが必死に何かを叫んでいるが、最早それは彼の耳には届いていなかった。
（くそ、力が入らねえ……俺のサッカーはこんな所で終わりかよ……）
ぐらりと染岡の体が揺れ、地面に広がった血溜りの中へ倒れ伏す。
（錦……すまねぇな。お前がプロになるのを…見届けてやりたかったが……でも、お前なら絶対なれるさ……）

薄れ行く意識の中で、懐かしい声が響き渡るのを感じて染岡はふと口元に笑みを浮かべた。

まるでそれが合図かのように、まぶたがゆっくりと閉じられる。

（『サッカーやろうぜ』…か……ああ、そうだよなぁ。円堂……豪炎寺……吹…雪……お前らと……ま……た……）

「ソメオカ?ソメオカ!……ソメオカーーーーッ!!」

チームメイトが必死に血塗れの染岡を揺さぶる。

強面のストライカーは、もう二度と目を覚ます事はみ無かった。

――――――この世界では。

1．帝国の襲来

「……か！　……おか！　染岡！」
「んぁ？」
勢い良く肩を揺さぶられて目を開ける。
すると目の前にあった顔がホッとしたような表情を浮かべた。
中学、高校、そして日本代表と、同じチームで戦ったＧＫ、円堂守である。
「どうしちゃったんだよ染岡、いきなり立ち止まったと思ったらボーッとしてさ」
「あ？　円堂じゃねえか、お前いつからこっちに……!?」
当然のように浮かんだ疑問を口にしようとして、染岡は強烈な違和感を感じた。
違う、何かがおかしい。
その正体を探るべく、染岡は円堂の体をジロジロと眺め回す。
「……円堂、お前なんか縮んでねえか？」
「なーに言ってんだよ！　もうすぐ帝国との試合だっていうのに、寝ぼけてるのか？
あっ！　もしかしてお前も楽しみで眠れなかったんだろ！」
真剣な染岡に対し、円堂は揶揄うように笑うと「行こうぜ！」と走って行ってしまう。

その後ろ姿を眺めていた染岡は、そこでようやく違和感の正体に気がついた。
円堂が着ていたのは雷門中のジャージだ。
それに今自分たちがいるのも今となっては懐かしい雷門中の廊下。
それらの情報と、脳裏に甦った暴漢に刺されてしまったという記憶。
この2つから、染岡はひとつの結論を出す。
（戻ったのか？　中学の頃に……）
自分の体に視線を落とすと、やはり円堂同様に雷門中のジャージを身にまとっていた。
現実的に考えて有り得ないが――――と、そこまで考えてから染岡は頭を振ってその思考を打ち消す。
「有り得ないという事は有り得ない」。
つい先日、染岡の教え子である錦龍馬のチームメイト達が本当に宇宙へ行って宇宙人達とサッカーをしてきたと聞いたばかりなのだ。
自分たちの想像を越える物などこの世には幾らでも存在する。ならば、自分が今体験しているこの状況もそういった物の1つに違いない。
となればあれこれ悩んでも仕方がない。これが現実ならばいくら思考したところで状況は変わらないのだから。

（もうすぐ帝国との試合……ってことは今頃は壁山が逃亡してる頃か）
遠い昔の記憶を掘り起こしていく。
壁山塀吾郎、染岡達雷門イレブンの守備の要を務めた巨漢だ。
日本代表で久しぶりに共にプレーした時も、その硬い守りは健在だったのを覚えている。
しかしこの頃はまだ臆病で、何かあるとすぐに逃げ出してしまうという悪癖があった。
（アイツも自信さえ見につければ凄い奴なんだがなぁ）
苦笑いを浮かべながら、染岡は壁山がこの時隠れていた廊下へ足を向ける。
到着してみれば、先に駆けつけていた円堂達が大柄な少年たちと何やら揉めている所だった。
その奥にはガタガタと振動するロッカーが佇んでいる。
「おい、どうした？」
「あ、染岡！　コイツらが壁山を相撲部に入れるって言い張っててさ……」
中学生とは思えない極道面の登場に、上級生であろう相撲部の面々は思わずたじろぐ。
しかし向こうも下級生相手に引く訳にはいかないのか、語気を強めて円堂に詰め寄っ

た。
「それならそっちのルールで戦ってやるでごわす。おいどんらのディフェンスを抜いて壁山くんのロッカーにボールを当てたらあんたらの勝ち、おいどんらがボールを奪えばこっちの勝ちで壁山くんはおいどんらと一緒に来てもらう。それでどうでごわすか？」
「おもしれぇ。そっちがその気なら乗ってやるぜ」
「染岡!?」
相撲部と円堂の間に割り込み、染岡が提案に応じる。
壁山の意志を無視した条件に円堂は難色を示すが、染岡は不敵な笑みを浮かべた。
「安心しろよ円堂、俺に任せとけ。それに……壁山はちょっとビビっちまってるだけだ」
「……わかった、頼むぞ！」
頷いた円堂は染岡へボールを手渡す。それを足元へ転がした染岡はロッカーの前に並ぶ相撲部へ好戦的な笑みを向けた。
まるで格好のカモを見つけたヤクザのようなその顔に、相撲部達は完全に気圧されてしまう。
「さてと、それじゃあ始めるか」
爪先で軽くボールを小突く。コロコロと転がり出すボールが合図かのように、相撲部達は一斉に染岡へ襲いかかった。

「遅せぇ！　『疾風ダッシュ』!!」
対する染岡は一瞬で加速し、相撲部達を全員ごぼう抜きにしてみせる。
そして再び足元のボールを小突くと、転がったボールはゆっくりとロッカーに当たった。
（どうやら……俺が覚えていた技は使えるみてぇだな）
度肝を抜かれる相撲部達には目もくれず、染岡は自分の体の各所を見回す。
プロに入ってから習得した技だが、どうやら問題なく使用できるようだ。取り敢えずはホッと息をつく。
そうして振り返ろうとした時、円堂が狂喜乱舞しながら染岡へと飛びついた。
「すっ……すげー!!　すげーよ染岡!!　お前いつの間にあんなに上手くなったんだ!?」
「へっ……隠れて特訓してたんだよ！」
特徴的なピンク色の坊主頭をワシャワシャと撫で回されながら、染岡は相撲部へ顔を向ける。
突然の事に何が起きたのかも分からないまま、相撲部達は呆然とロッカーの付近に転がるボールを眺めていた。
「な……何が起きたでごわすか……いきなり消えて……」
「勝負は俺の勝ちだな。お望みならもう1回やってやるぞ？」

染岡の言葉に、相撲部達は悲鳴をあげながら逃げていく。
ドスドスと廊下を揺らしながら走り去るその背中を見送ってから、染岡は揺れるロッカーへ呆れ顔を向け、大きく息を吸い込んだ。
「――――ゴルルァァッ!! 壁山ァァッ!!」
「ヒィ――――ッ?!!」
ヤクザ顔負けの怒声に、ロッカーの中から壁山が慌てて転がり出てくる。
涙目の壁山を見下ろしながら、染岡はニッと笑うと手を差し出した。
「つたく、ホレ。立てるか?」
「そ、染岡さん……」
壁山がおずおずと手を握り返すと、染岡はそのまま自分の倍はある巨体を引き起こす。
「お、怒らないんスか?」
「あ? 怒らねぇよ、帝国にビビる気持ちは分かるからな」
俺だってそうだった。口にはしないが、心の中で呟く。
あの試合のことは覚えている。
何も出来ずに一方的に蹂躙され、目の前で仲間達が傷付いていく。
その光景に、染岡は確かに恐怖を抱いてしまっていた。

だからこそ――――あの時、1人で立ち上がった円堂を尊敬し、1人で対抗した豪炎寺に敵対心を抱いてしまったのだ。

「けどよ、俺たちが逃げちまったらコイツは……円堂は1人でも帝国に向かっていっちまうだろ。きっと円堂はボコボコにされたって立ち上がっちまう。そうさせねえ為には、俺たちの力が必要なんだよ。だから……お前ら、力を貸してくれ！」

染岡の言葉に、壁山だけでなくその場にいた少林や栗松ら後輩、影野やマックス達新入り達も心打たれたように頷く。

特に傍らの円堂は、染岡の言葉を聞いて嬉しそうに笑った。

「よっしゃー！　皆、円陣だー!!」

廊下の真ん中で、全員で円陣を組む。

周囲の視線を集めながら、円堂は思い切り叫んだ。

「帝国に……絶対勝つぞ!!」

「「「おう!!!」」」

「鬼道さん、なんでこんな学校へ？　大会に出ていない所か、サッカー部すら出来たばかりじゃないですか」

帝国学園側のベンチで準備をしながら、水色の長髪に眼帯をつけた少年　佐久間次郎が隣のキャプテンに尋ねる。
後ろに束ねたドレッドヘアにゴーグルという、中学生らしからぬ奇抜な外見の少年鬼道有人は表情を変えないまま短く答えた。
「総帥の指令だ。それに、この学園にはあの男がいる」
「豪炎寺修也……炎のストライカーですか」
ああ、と頷いて、鬼道は雷門中のベンチへ視線を向ける。
釣られて視線を向けた佐久間は、しかしあれ？　と拍子抜けしたような声を漏らした。
「……鬼道さん。いませんけど、豪炎寺」
「……なんだと？」
佐久間の言葉に、鬼道はゴーグル奥の目を細めて雷門ベンチを確認する。
確かに、事前より監督である影山から貰っていた資料にある顔は見当たらなかった。
精々とても中学生とは思えない、極道のような男が座っているぐらいだ。
影山とは別ベクトルの恐ろしさを纏う男に、鬼道は思わず隣の佐久間と顔を見合わせる。
「……どういうことだ？」

「……さあ？」
２人で首を傾げていると、整列の笛が鳴る。
佐久間は対面に立つ先程の極道の気迫に、思わず目を逸らしてしまった。
その隣で鬼道と円堂がキャプテン同士で握手を交わす。
「今日は宜しく頼む。……ところで、豪炎寺はいないのか？」
「豪炎寺？　アイツ……なんか今はサッカーを出来ない事情があるらしくてさ」
「……そうか。取り敢えず、お互いに頑張ろう」
やや落胆した様子を見せながら、鬼道は自分のポジションへ向かう。
苦笑いを浮かべながらそれを見送る円堂の肩を、染岡が叩いた。
「なぁに、アイツが思わずサッカーやりたくなるような試合をしてやればいいんだよ！
行こうぜ円堂！」
「染岡……！　そうだ、そうだよな！　よーし！　行くぞ皆――！」
円堂が拳を突き上げると、ピッチの皆も応じるように歓声を上げる。
帝国側は、それを冷めた表情で眺めていた。
「豪炎寺が出ないんじゃ、あんな弱小校とやる意味なんてねぇじゃねえか」
「仕方ないだろう。それに、まだ可能性はゼロじゃない」
文句をいうストライカー　寺門へ、鬼道はニィと口元に笑みを浮かべる。

それを見て、マスクをつけた少年　咲山とお面のような顔の小柄な少年　洞面が同情するような表情を浮かべた。
「あーあ。雷門側は地獄だねこりゃ」
「ご愁傷さま」
自分たちの有利を信じて疑わない帝国イレブン。
その自信は、試合開始直後に粉々に砕かれることになる。

ピ――ッ！　と試合開始の笛が鳴る。
キックオフは雷門。目金欠流がボールを蹴ると同時に帝国のＦＷ、佐久間と寺門が飛び出した。
「へっ……」
ボールを受け取った染岡は不敵な笑みを浮かべると、両足でボールを挟んでそのまま跳躍する。
「なに!?」
予想外の動きに不意をつかれた佐久間の頭上を、染岡の体が飛び越える。
着地し、そのまま駆け出す染岡の進路を帝国のＭＦ咲山と鬼道が塞いだ。
「『キラースライド』!!」

「喰らうかよ、マックス！」
　もう一度跳躍し、咲山の高速スライディングを回避した染岡は上がってきていたマックスへとパスを出す。
　それを受け取り、攻め込もうとしたマックスの前に洞面が立ちはだかった。
「『キラースライド』!!」
「うわぁっ!?」
　洞面は先程の咲山と同じ技を放ち、マックスを吹き飛ばす。
　零れたボールを拾った洞面は、そのまま前方の寺門へパスを出した。
「オラァッ!!」
「なぁっ!?」
　しかし宙を舞う染岡がパスをカットする。
　寺門と染岡、２人の強面の視線が空中でぶつかり合う。
　しかしそれは一瞬のことで、着地した染岡はすぐに全線へ向けて走り去ってしまった。
「待ちやがれ!!」
「寺門、落ち着け！」
　自陣のゴール前まで攻め込む染岡を追いかけようとする寺門を、もう1人のＦＷであ

る佐久間が押し留める。
しかし内心では、佐久間も平静ではいられなかった。
（最初のあのプレー、反応できなかった……！）
最強のチームである帝国学園、そのレギュラーを務める自分の上を行くプレイヤーの存在。
もしかしたら、あの男は、この中学は自分たちが考えているよりも遥かに恐ろしい存在なのでは？
佐久間を不安が襲う。
しかし駆け上がる染岡の前に鬼道が飛び出した。
「まさかお前のような選手がいたとはな、予想外だよ」
「鬼道か！」
唯一染岡の動きに反応していた鬼道に、佐久間は拳を握り締める。
そうだ、自分たちにはこの男がいるのだ。
天才ゲームメイカー鬼道　有人。
彼がいる限り、帝国の敗北はありえない。
さらに染岡の両サイドを五条、大野のＤＦ陣が囲む。
見たところ帝国の動きに着いてこれるのはあの中学生極道１人だけ。ならば彼１人

を徹底マークすれば済む話だ。

「……へっ」

３対１の圧倒的不利な状況で、しかし染岡は不敵な笑みを浮かべていた。

（プロの世界じゃ、数による有利不利なんて存在しなかったぜ）

思い出されるのはイタリアでプロサッカー選手として活躍した日々。

プロの世界というのはそれまで経験してきた中学、高校のサッカーとは文字通りの別次元であった。

高速移動、分身なんて日常茶飯事。槍の雨どころか隕石のシャワーが降ってくるなんて特に珍しくもない光景だった。

光の速さを越えて衝撃波を巻き起こしたり、次元を切り裂いて自軍のゴール前から相手のゴール内へ直接ボールをねじ込む奴なんていて当然。

キーパーに至っては超握力でブラックホールを生み出すような奴もいた。それでも染岡の知る円堂の方がセーブ率は高かったが。

そういう世界で、染岡は何度もへし折られながらも〝ドラゴンストライカー〟の称号を得るまで戦い抜いてきたのだ。

だからこそ。この程度の状況では染岡にとって不利になり得ない。

「上がガラ空きだぜ！」

上空へ向けてボールを蹴りあげた染岡は、そのまま自身も跳躍する。
「借りるぜ錦……『アクロバットキープ』！」
空中で身を捻り、ボールをキープしたまま鬼道達の頭上を飛び越える。
染岡の教え子、錦龍馬の技だ。
慌てて鬼道が振り返れば、すでに染岡は帝国のＤＦラインを突破し終えていた。
「止めろ源田――――ッ!!」
普段冷静な鬼道が、感情を露わにして叫ぶ。
ゴール前で染岡を睨めつけていたＧＫ　源田幸次郎はその叫びに頷いて返すと、両拳にエネルギーを集めた。
そしてそのまま跳躍する。
「『パワー……シー」
「遅せぇよ！　『ドラゴンクラッシュ』!!」
しかし源田の技が発動しきるよりも早く、染岡が勢い良くボールを蹴り付ける。
その次の瞬間には、ボールは源田の後方でゴールのネットへ突き刺さっていた。
ぶわっ、と。着地した源田の全身から冷や汗が噴き出す。
見えなかった。あの強面がボールを蹴ったかと思ったら、既にゴールを決められていたのだ。

世代最強ＧＫ、キングオブゴールキーパー、自分が積み上げてきた栄冠にヒビが入るのを感じる。
ワナワナと震える手から、集中させたまま放てなかったエネルギーが霧散していく。
帝国イレブンも、点を入れた側である雷門イレブンも、グラウンドを取り囲んでいた観客達も、そして、木陰で様子を伺っていた豪炎寺も。
誰一人として声を発する事も動く事も出来なくなっている。
静寂に包まれるコート、その中で、染岡竜吾だけがゆっくりと拳を天へ向けて突き上げた。

2．デスゾーン

木の陰から試合を見守っていた豪炎寺修也は、知らず知らずの間に胸のペンダントを強く握り締めていた。

とんでもないシュートだった。同じＦＷとして、思わず憧れてしまう程の。

……サッカーがやりたい。

胸の内に浮び上がる思いを、無理やり抑え込む。

ダメだ、俺にその資格は無い。思い出せ修也、夕香は誰のせいで事故にあったんだ。

自分自身へ言い聞かせるようにしながら、再びコートへ目を向けた豪炎寺は思わず息を呑む。

たった今、シュートを放った男、染岡。

彼が、コート上からこちらをジッと見つめていたのだ。

その目を見返した豪炎寺は、彼が言わんとしている事を感じ取る。

――――お前はそれで満足なのか？

「そんな訳……ないだろ……！」

木の幹へ勢い良く拳をぶつけながら、豪炎寺は絞り出すように呟く。

見てるだけでは満足できない。
俺も……俺だって、サッカーがやりたい。
染岡は、豪炎寺の葛藤を感じ取ったのか、背中を向けて得点に沸き立つ仲間達の元へ戻って行く。
「俺は……俺は……!!」
迷う豪炎寺、しかし彼に構うことなく、試合は再開しようとしていた。

校庭前に止められた帝国学園の大型車両。
そこから試合の様子を眺めていた帝国学園の監督　影山零治は、苛立たしげに椅子の手摺を殴りつけた。
「何者だ、あの選手は」
「は、はい！　名前は染岡竜吾。雷門中学の2年生、サッカー歴は小学生から、それ以外は特筆すべき情報は何もありません！　至って平凡な学生です！」
側近の報告に、影山はもう一度手摺を殴りつける。
平凡、あれが平凡だと？
ならば何故自分が選出し、鍛え上げた帝国の選手たちがこうして圧倒されている。

「……鬼道達へ指示を出せ。出し惜しみするな、とな」
「は、はいっ！」
一礼し、影山の側から離れる側近。
それに目もくれず、影山はコート上の染岡をサングラスの奥から睨み付けた。
「――――アレは野放しにしていい存在ではない。私の元へ来るならよし、来ないのなら……サッカーを出来なくしてしまえばいいのだ」

「……了解です」
キックオフ前、影山からの指示を受け取った鬼道は静かに頷いた。
内容を確認した帝国イレブンも、鬼道の顔を見て頷く。
「奴らが弱小校だという認識は捨てろ、出し惜しみは無しだ」
ポジションに着く帝国イレブン、佐久間がボールに触れると同時に、鬼道は指を鳴らして高らかに宣告する。
「――――デスゾーン……開始」
帝国の逆襲が、始まる。

「気ィ引き締めろよ！」
「「おう！」」
染岡の呼び掛けに、マックスや風丸達は頷く。
恐らく今の1点で帝国側の余裕は失われた。ここからは向こうもなりふり構わず攻めてくる筈だ。
（豪炎寺は……）
ポジションにつきながら、木陰に隠れている豪炎寺の様子を伺う。
ツンツン頭の少年は、未だに同じ場所から試合の様子を眺めていた。
しかしその表情は最初の冷めたものとは打って変わって、様々な感情が渦巻く複雑なものになっている。
（まだ来ねぇか。だが……俺は知ってるんだぜ？　お前がどれだけサッカーが好きなのか）
サッカーを守るためなら平気で汚名を被るような男だ。きっと今だって試合に参加したくてウズウズしてるに違いない。
染岡は待ち続ける。炎のストライカーの復活を。

ピ――――ッ!!

帝国のキックオフで試合が再開する。
ボールを受け取った佐久間はすぐさま後方の鬼道へパスを出すと、寺門、洞面と共に雷門ゴールへ向けて走り出した。
「デスゾーンか！」
染岡の呟きに鬼道は一瞬驚愕するが、すぐさま笑みを浮かべると前線の佐久間へ向けてパスを出す。
「そうだ、止められる物なら止めてみろ！」
「上等だ!!」
『疾風ダッシュ』でボールよりも早く駆け出そうとした染岡は、そこで動きを止める。
ここであのパスをカットし、デスゾーンを完封するのは簡単だ。
だが全てそうして円堂の成長の場を奪ってしまって本当に良いのか？
影山の野望を阻止する為にも、そしてサッカーの未来を守る為にも、必要なのは染岡竜吾ではなく円堂守だ。
それに、自分1人で仲間の役割を奪う――――染岡の愛するサッカーとは、そんなワンマンプレーの競技ではないのだ。
染岡は足を止め、ジッと円堂を見つめる。
視線を受けた円堂は1度だけ染岡へ頷き返すと、ボールの動きに意識を集中させた。

「どうした？　あのキーパーじゃデスゾーンは止められんぞ」
「俺はＦＷだ。サッカーってのは１人でやるもんじゃねえからな、俺の役割は後ろの仲間を信じて攻撃の機会を待つ事なんだよ！」
「随分とあのキーパーを買っているようだな」
　見る目がないな、と言わんばかりに鬼道は鼻で笑う。
　昔の自分なら鬼道へ掴みかかっていたかもな、そんな事を考えながら染岡はフッと笑みを漏らした。
「今に分かるぜ、アイツの凄さがよ」

　パスを受けた佐久間が上空へボールを蹴りあげる。
　そこへ体を回転させながら洞面、寺門、そして遅れて佐久間もボールを追うように跳躍した。
「『デスゾーン』!!」
　三方向から同時にボールを蹴り付け、エネルギーを纏わせたシュートが放たれる。
「うおおおおおおおっ!!!」
　迫り来る強力なシュートに対し、円堂は右腕を突き出した。
　一瞬、まるで巨大な掌のような物が浮かび上がってシュートを受け止めかける。

だがそれは本当に一瞬で、次の瞬間にはボールは円堂の体ごとゴールに突き刺さっていた。
「なんだ、今のは……」
今の掌が見えていたのか、鬼道が小さく漏らす。
ヨロヨロと立ち上がりながら、円堂は不思議そうな顔で自身の右手を眺めた。
「今のだ……今のがじいちゃんのノートにあった必殺技だ！」
点を取られた事すら気にせず、切っ掛けを掴んだ事ではしゃぐ円堂。
おかしくなったのか、と栗松や壁山が円堂の元へ駆け寄った。
「どうしちゃったでやんすか？」
「キャプテン！　大丈夫すか？」
心配そうに覗き込む後輩二人の肩をバンバン叩きながら、円堂は呆気からんと笑ってみせる。
「だいじょーぶだって！　なんか、掴めた気がするんだ！　よーし!!　次は止めてみせるぞ！」
バンバンと拳を手のひらに打ち付ける円堂。
それを眺めながら、壁山と栗松は不思議そうに首を傾げた。

前半が終わり、1―2。
結局その後、もう一度デスゾーンを打たれて失点したものの、予想以上の接戦に観客も雷門ベンチも盛り上がっていた。
「もしかしてこれなら……勝てちゃうんじゃないですか!?」
「染岡さんにボールが渡せれば、きっと勝てますよ！」
宍戸と少林がはしゃぎながら言う。
しかし水分補給をしながら、当の染岡は冷静そうに窘めた。
「まだはしゃぐのは早ぇよ。相手は不敗の帝国だぞ、まだ隠し玉があっても可笑しくねぇ」
「それは……そうですけど。……なんか、染岡さん変わりましたね。まえは真っ先にはしゃぎそうだったのに」
染岡に言われてしゅんとしながら、宍戸が尋ねる。
染岡はそうか？　と後輩のさりげないｄｉｓりを気にする様子もなく円堂の方へ話しかける。
「円堂、どうだ？　何か掴めたか？」
「うーん……もうちょっと！　って感じなんだよなぁ……くぅー！　俺の技さえ完成すれば試合に勝てるのに！」

「俺たちもキャプテンの技が完成するまでサポート頑張るっす！」
和気藹々といった様子の雷門イレブン。
その様子を微笑ましく見守っていたマネージャーの木野秋は、その中に目金の姿が無いことに気がついた。
「あれ？　目金くんは……？」

「１０番を貰ったのにいい所は全部染岡くんに持ってかれちゃってるじゃないですか！　帝国の選手は目がぎらついてて怖いし、横の染岡君はもっと怖いし……もう付き合いきれません！」
ベンチから離れたところで、目金はユニフォームを脱ぎ捨てるとそのまま走り去ってしまう。
その様子を伺っていた豪炎寺は、地面に置かれたユニフォームをじっと見つめていた。
体が燃えるように熱い。
試合を見ていただけだと言うのに、既にウォーミングアップは必要ないほどに体内のエンジンはかかり切っていた。

あとは豪炎寺自身が動くのを待つだけだ。
「夕香……俺は、結局のところ……どうしようもなくサッカーが好きみたいなんだ」
1歩、木陰から踏み出す。
手は、いつの間にか胸のペンダントを固く握り締めていた。
1歩、また1歩。
気がつけば地面に置かれたユニフォームの前にいる。
それを拾い上げて、豪炎寺は何かを決意したような表情を浮かべた。
「兄ちゃんに……もう一度……チャンスをくれ！」
ユニフォームを片手に豪炎寺は走り出す。
炎のストライカーは、再びフィールドに甦ろうとしていた。

「豪炎寺修也……円堂守」
前半の内容を思い返しながら、影山は苛立たしげに名前を呟いていた。
この2人が帝国の障害となり得る事は予想できていた。
去年のフットボールフロンティアにて、ただ一人帝国のゴールを脅かす可能性があった〝炎のストライカー〟豪炎寺修也と。

かつて影山自身の手でこの世から葬った〝伝説のイナズマイレブン〟の監督　円堂大介の孫　　円堂守。
だが蓋を開けてみればどうだ。あの2人が問題にならない程の化け物が潜んでいたではないか。
「染岡竜吾……!!」
サングラスにピンク坊主の中学生極道を映らせながら、影山は怒りを込めてその名を呟く。
アレは障害だ。自分にとっての敵だ。
なんとしても排除しなくてはならない。
「鬼道へ繋げ」
「はっ!」
側近が手元の端末を操作すると、影山の眼前のガラスに鬼道の姿が投影された。
「……申し訳ありません、総帥。不甲斐ない戦いをお見せしました」
「気にするな、あの選手の存在は私のリサーチ不足だ。それよりも、後半の指示を出す」
「はっ!」

それぞれの思惑が混じり合いながら、後半戦が始まる。

3．炎のストライカー

「奴らを潰す……!?」
「あぁ。総帥の指示だ」
鬼道の言葉に、ストライカーの寺門は難色を示した。
「買い被りすぎじゃねえのか？　たしかにあのピンク坊主はやばい野郎だが、アイツ以外はただの雑魚じゃねえか」
「確かに……キーパーも、源田と比べれば数段劣りますよ」
言いながら佐久間はチームの輪から少し離れた所で佇む源田をチラリと伺う。
先程のシュートを忘れられないのか、源田は未だに自身の拳を見つめていた。
「お前たちは感じなかったのか?」
「……？　何をですか？　鬼道さん」
ぼそりと呟いた鬼道に、佐久間が尋ねる。
しかし鬼道はそれに答えずに、マントを翻すと雷門ベンチへ視線を向けた。
その中の、バンダナをつけた少年をジッと見つめる。
「円堂、守……!」

先程見せた、あの必殺技の片鱗。
もしあれが完成したならば
その時、自分たち帝国は敗北するのではないか？
そんな不安が、鬼道を襲う。
「寺門」
「なんだ、鬼道」
水分補給を行っていた寺門は、ボトルから口を離すとその悪人面を鬼道へ向ける。
ほんの少しの焦りを滲ませながら、鬼道は寺門へ後半の指示を出した。

「目金が居なくなったァ!?」
秋の報告に円堂が素っ頓狂な声を出す。
「うん、探したけどどこにもいないの。観客の人に聞いたら、さっき走ってどこかへ行っちゃったって……」
「そ、そんなぁ……いくら染岡さんが凄くてもあの帝国に１０対１１じゃ無茶っす……！」
壁山が不安を隠せずに呟く。

壁山だけでなく、他のメンバーも不安そうに円堂を見つめていた。
「無茶なんかじゃない！　部員が揃ったばかりの俺たちが帝国とここまで戦えてるんだ、諦めなければきっと何とかなる！」
「でも、前半戦えたのは殆ど染岡さんのお陰でやんす！　ただでさえ劣勢なのに人数が足りない状態じゃ、帝国の攻撃は凌げないでやんすよ！」
根拠の無い円堂の言葉に、堪らず栗松が反論する。
その様子を黙って見ていた染岡は、ふと豪炎寺がいた木陰へ視線を向けた。
しかしそこにツンツン頭の少年の姿は既にない。
染岡が観客の中から豪炎寺の姿を探していると不意に校門の方が騒がしくなった。
円堂も、騒いでいた栗松達も、染岡も、一斉にそちらへ視線を向ける。
まるで神話のモーセのように人の海を真っ二つに割いて、1人の少年がこちらへ向かって歩いて来る。
特徴的な、金髪を逆立てた髪型に稲妻眉毛。
襟を立てたユニフォームの背中にエースナンバーの〝10〟を背負い。
〝炎のストライカー〟豪炎寺修也は、不敵な笑みを浮かべながら雷門イレブンの前に姿を現した。
「豪炎寺……」

円堂は震えながらその名を呟く。
呆けたような顔が見る見るうちに笑顔に変わり、我慢できないといった様子で円堂は豪炎寺の元へ駆け寄った。
「来てくれたんだな、豪炎寺！　一緒にサッカー、やってくれるんだよな！」
「ああ」
興奮を抑えきれない様子の円堂に手をがっしりと掴まれ、豪炎寺は口元に笑みを浮かべて見せた。

「豪炎寺修也……」
騒がしい雷門ベンチを眺めながら、その原因である少年の名を呟く。
鬼道は珍しく焦りを見せる。
それを感じ取ったのか、傍らの佐久間が不安そうに鬼道の顔を覗き込んだ。
「鬼道さん……」
「……作戦は変わらん、行くぞお前たち。我ら帝国の力を思い知らせてやれ!!」
「「はっ!!」」

「待ってたぜ、豪炎寺」
「あぁ、待たせたな」
並び立ちながら、染岡と豪炎寺は不敵な笑みを浮かべる。
２人の視線は既に帝国のゴールに集中していた。
「見せてもらおうじゃねえか、炎のストライカーの実力をよ」
「任せろ、すぐに決めてやるさ」

ピ――――ッ!!
後半開始の笛が鳴る。
帝国ボールで始まると同時に、寺門が勢い良く攻め込んで来た。
「オラオラァ!!」
「うわっ！」
止めに入ったマックスが突き飛ばされ、尻もちをつく。
さらに駆け付けた半田へ向けて、寺門はボールを蹴りつけた。
「なっ……相手にパスを!?」
困惑しながら胸でトラップする半田。

そこへ寺門は勢い良く跳躍すると半田の胸元のボールへ後ろ回し蹴りを叩き込んだ。
「『ジャッジスルー』！」
「ぐぁっ!?」
堪らず後方へ吹き飛ばされる半田。
そちらに目もくれず、寺門はその勢いのまま転がったボールを拾い上げるとＤＦラインを突破する。
「半田!!」
「余所見してんじゃ……ねぇ!!」
叫ぶ円堂へ、寺門はノーマルシュートを撃ち込む。
猛烈な勢いで迫るシュートは円堂の両掌にぶつかって弾かれた。
宙を舞うボールはそのまま寺門のシューズの下に収まる。
「そら！　もう一丁ォ!!」
「させないっす!!　ぶっ!?」
飛び込んできた壁山の顔面に、寺門のシュートが激突する。
壁山はそのまま白目を向いて仰向けに倒れてしまった。
円堂が慌てて駆け寄ろうとするも、その間すら与えずに寺門は再びシュートを放つ。
「今度はコイツだ!!　止めてみやがれ!!」

上空へボールを蹴りあげる寺門。遅れて自身も高く跳躍すると、猛烈な勢いで何度も空中のボールを蹴り付けた。
「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラファッ!!　喰らいやがれッ！　『百烈ショット』オッ!!!」
「ぐっ……負けるかぁぁぁっ!!」
円堂は勢い良く踏み込むと、再び右腕をボールへ向けて突き出す。
再び巨大な掌が浮かび上がるも、寺門の必殺シュートの前にあっさりと掻き消されてしまった。
圧倒されて尻もちをつく円堂の背後で、ボールがネットを揺らす。
「くぅぅぅ……あと少し、あと少しなんだ!」
「鬼道のヤツ、何を警戒してんだ?　デスゾーンどころか俺一人のシュートすら止められねぇような雑魚を……」
右手を見つめながらブツブツと呟く円堂を、寺門は気味の悪そうな顔で一瞥した。
3—1、雷門ボールで試合が再開する。
「構えろ、豪炎寺が来るぞ」
世代最強を誇る帝国の面々が思わず身構える。
ホイッスルと同時に染岡からボールを受け取った豪炎寺は、そのまま一気に帝国ゴー

ルへ切り込んだ。
「ククク……『キラースライド』!!」
五条の放った高速スライディングを飛び越え、続いて立ち塞がった大野を素早いフットワークで翻弄する。
見る見る内に帝国ディフェンス陣が突破されていき、あっという間に豪炎寺と源田の一騎打ちまで持ち込まれた。
「そう何度もゴールは割らせん！『パワーシールド』ォ!!」
吠えながら、先程は不発に終わった必殺技を発動する源田。
豪炎寺はそれを冷めた表情で一瞥すると、踵でボールを頭上へ蹴り上げた。
直後、周囲に炎が巻き起こり、それを纏いながら空中へ駆け上っていく。
空中のボールと同じ高さまで到達すると同時に、豪炎寺は回転の勢いを利用してボールを蹴り付けた。
「『ファイアトルネード』！」
「何?! ぐうっ……!!」
豪炎寺のファイアトルネードと、源田のパワーシールドが激突する。
拮抗する2つの技、しかし豪炎寺はその結末を見届けることなく、まるで結果はわかり切っていると言わんばかりにゴールへ背を向けた。

「ぐっ……うおおおおっ!!」
力を込め続ける源田の目の前で、受け止めていたボールが炎を纏いながら勢いを増して行く。
自身の発生させたシールドに亀裂が走っていくのを、源田はただ吠えながら見ていることしか出来なかった。
「おぉぉぉおおおおおおおおおおおお!!?」
源田の必殺技が打ち破られ、ボールがゴールネットを揺らす。
学校全体を揺らすような歓声の中、豪炎寺はクールな表情を崩さないまま右手を挙げてその声援に応えた。
一点を獲ったかと思えば、すぐさま一点を返される。
流石の帝国イレブンも、先程までの余裕を完全に失ってしまっていた。
1点リードしているとはいえ、この相手にそれだけの点差では余りにも心許ない。
「行くぞ寺門、洞面！　デスゾーンだ！」
「「おお！」」
再開と同時に、ボールを持った佐久間が雷門ゴールへ向けて駆け上がる。
それに追従する寺門と洞面。染岡と豪炎寺を除けば雷門側の守備など帝国にとっては余りにも脆い。

あっという間にゴール前まで到達した佐久間は頭上へボールを蹴りあげると、自らもそれを追うように跳躍した。
それに寺門、洞面も続き雷門ゴールの上空で禍々しい三角形が形成される。
「我ら帝国に敗北は許されない！　喰らえ雷門！　これが俺達の……」
「「『デスゾーン』!!」」

佐久間が叫ぶと同時に、三方向からの蹴りがボールへ叩きつけられる。
巨大なエネルギーと共に迫り来る必殺シュート。
それを止めようと身構える円堂の目に、帝国ゴールへと駆け上がる豪炎寺と染岡の姿が写った。
（アイツら……俺を信じてるんだ！　俺がシュートを止めてパスを出すのを待ってる！）
円堂の体が熱くなる。
胸の奥から湧き上がってくるような〝力〟を、円堂は掌から体の外へ解き放った。
まるで稲妻のように光り輝きながら、巨大な掌が円堂の右手から浮かび上がる。
驚愕する帝国イレブンと雷門イレブン。全員の前で、その掌がデスゾーンと激突した。

「これが……!!　じいちゃんの必殺技……『ゴッドハンド』だぁぁぁぁッ!!」
円堂が叫ぶ。
光の掌に包み込まれたデスゾーンは次第に勢いを弱めていき、やがて円堂の手の中で完全に動きを止めた。
「と、止めやがった……!」
「馬鹿な……」
寺門と佐久間が、目の前の光景に信じられないといった様子で呟く。
円堂自身もびっくりしたようにボールを見つめていたが、すぐに満面の笑みを浮かべると前線を駆け上がる豪炎寺達へと大きなパスを出した。
「行っけ――――――ッ!!」
山なりに飛んでくるパスを胸で受けた豪炎寺はそのまま上空へボールを蹴り上げる。
再び炎を纏いながら空へ駆け上がる豪炎寺の目に、ゴール前まで走る染岡の姿が写った。
「『ファイアトルネード』!!」
先程と同じ炎のシュート。しかし今度は直接ゴールを狙うのではなく、前方の染岡へ向けて放たれる。
背後から迫るボールを一瞥した染岡は笑みを浮かべると、宙返りをしてボールの後ろ

へ回り込んだ。
「とっておきの〝ダメ押し〟ってヤツだ！」
染岡が足を振り抜くと同時に、そこから放たれた光の龍が炎を纏うボールへ絡みつく。
そこへ染岡の勢いを付けた飛び蹴りが叩き込まれ、ボールは溜め込んだ力を暴発させるように帝国ゴールへ向けて吹き飛んだ。
「『ドラゴンブラスター』!!」
「なっ……」
空気を切り裂きながら放たれたシュートは、源田の頬を掠めながらゴールネットに突き刺さる。
その威力にネットだけでは耐えきれなかったのか、ゴールポストが後ろ向きに倒れ込んだ。
ズシンという重い音が響き、呆気に取られていたその場の全員が我に返る。
「染岡」
名前を呼ばれ振り返ると、不敵な笑みを浮かべる豪炎寺が右手を差し出している。
染岡も笑みを浮かべると、左手を豪炎寺の手と打ち合わせた。
後に〝伝説のイナズマイレブン〟において双璧をなす2人のストライカー、その出会

いの瞬間であった。

（――――ここまでか）

影山零治は、諦めたように天を仰ぐ。

ただでさえ染岡竜吾を止められなかった所へ豪炎寺修也が加わり、更に円堂大介の孫が『ゴッドハンド』を習得してしまった。

現状こそ引き分けだが、このまま続けても帝国の勝ち目は薄いだろう。それどころかこちらの敗北も十分に有り得る。

それだけは認められない。

それだけは、影山のプライドが許さないのだ。

（鬼道……私の最高傑作だと思っていたが……〝代わり〟の完成を急ぐ必要があるな……）

教え子への失望を感じながら、影山は手元の小瓶をつまみ上げて軽く振る。

中に収められていた透明な液体は、揺らめきながらモニターの光を反射して怪しく煌めいた。

「雷門中、我々帝国はここで棄権する」
「!?」
同点に喜んで沸き立つ中、不意に放たれた鬼道の言葉に思わず雷門イレブンの面々は動きを止めた。
「試合はそちらの勝利で構わん」
「おい待てよ、鬼道。逃げるのか?」
背中を向ける鬼道を、染岡が挑発する。
しかしそれに乗ること無く、鬼道は不敵な笑みを浮かべながら返した。
「こんな所で決着を付けるのは勿体無い。俺たちの決着は……フットボールフロンティアで付けよう」
ゴーグルの奥の目が、雷門の3人を捉える。
炎のストライカー、豪炎寺。

デスゾーンを止めたＧＫ、円堂。
そして、染岡。
「待っていろ、フットボールフロンティアまでに俺たち帝国は更にレベルアップしてみせる」
「あぁ、俺たちもそこまで絶対に負けない！」
無邪気に笑う円堂、その笑顔に若干毒気を抜かれながら、鬼道は片手を挙げて帝国の大型車両へ向けて去って行った。

「鬼道さん……」
車両内へ戻ってきた鬼道にどう声を掛けていいかも分からず、佐久間は俯く。
佐久間だけでなく、他の面々も悔しげな表情で視線を伏せていた。普段感情の読めない五条でさえ、落ち込んだ様子で俯いている。
無名の中学相手に苦戦させられたという屈辱、そしてたった1人の選手に一方的に負けたという敗北感。
特に自慢のシュートを止められた寺門、ゴールを3度も破られた源田は表情を歪ませながら項垂れている。
そんな仲間たちを見回しながら、鬼道は嘆息し――――そして大きな声で宣言する。

「フットボールフロンティアだ」
その言葉に、下を向いていた全員の視線が顔を上げる。
車両内の視線を集めながら、鬼道は言葉を続けた。
「奴らとの決着はフットボールフロンティアでつける。その時こそ、我ら帝国が奴らを完膚無きにまで叩き潰してやるんだ。いいかお前たち、明日からの練習は厳しく行くぞ！」
「――――――――――――はっ！」
「「はっ！」」
佐久間が真っ先に敬礼で返し、遅れて他のメンバーも敬礼する。
鬼道はそれをみて頷くと、車両の最前列にある自分の席に腰を降ろして小さく呟いた。
「待っていろ雷門。次に勝つのは……俺たちだ」
初めて味わう敗北感。しかし存外に悪くないそれを噛み締めながら、帝国の面々を載せる車両は自分たちの学校へ向けて走り出した。

「棄権ってことは……俺たちの勝ちでやんすか!?」

「勝った訳じゃないだろ。3―3なんだから」
わなわなと震えながら信じられないといった様子で呟く栗松の言葉を、豪炎寺が冷静に訂正する。
そんな豪炎寺の肩に腕を回しながら、円堂は嬉しさを抑えきれないといった様子で拳を空へ向けて突き上げた。
「でもこの間までメンバーも揃わなかった俺たちが、あの帝国相手に引き分けたんだぞ！　よーし皆!!　豪炎寺と染岡を胴上げだー!!」
「「おー！」」
歓声を上げながら2人の元へ殺到する雷門イレブンや観客達。
四方から揉みくちゃにされながらも、何とか人垣の中から這い出した豪炎寺は乱れた髪や服を直しながら、同じく這い出してきた染岡へ歩み寄った。
胴上げのターゲットは変更になったらしく、今は円堂が何度も空中へ投げ出されているのが見える。
「染岡、ちょっといいか?」
「あん?　どうした」
服のホコリを払いながら染岡は豪炎寺の方へ顔を向ける。
豪炎寺は怯むことなく染岡の強面を真正面から見つめ、ゆっくりと右手を差し出し

た。
「ありがとう、お前のプレーのお陰で、俺は目が覚めた」
「……なんの事だから分からねぇな。俺はお前に何も言ってねえし、何もしてねぇ。お前の行動は、お前自身が決めたモノだろうが……まぁ、これからよろしく頼むぜ、豪炎寺」
照れを隠すように顔を背けながら、染岡はぶっきらぼうに豪炎寺の右手を握り返す。
握手を交わしたまま、豪炎寺は言葉を続けた。
「1つ、頼みがある。お前たちの仲間になる前にどうしても行かなきゃならない場所があるんだ。お前と円堂には、良ければ一緒に来てもらいたい」

「そっか、妹さんが事故に……」
病院のベッドで静かに寝息を立てる少女を前に、円堂は悲痛な面持ちで立ち尽くしていた。
染岡も事情は知っていたものの、こうして実際に見て豪炎寺の心情を思うと悔しい思いを抑えきれない。
少女の名は豪炎寺　夕香、豪炎寺の最愛の妹である。

約1年前から、彼女はこの病室で1度も目を覚ますことなく眠り続けていた。
「ごめん、豪炎寺。俺、お前の事情も知らずに……」
「いいんだ」
円堂の言葉に、豪炎寺は首を振る。
そして握っていた妹の小さな手をそっと離すと、立ち上がって染岡と円堂へ向き直った。
「俺は、もう少しで間違える所だった。妹を理由にして、サッカーから逃げようとしていたんだ」
そんな……と言いかける円堂へ笑いかけ、豪炎寺は言葉を続けた。
「だがお前たちの……雷門のサッカーを見ていたら、やっぱり俺自身のサッカーへの思いは裏切れなかったんだ」
意識のない妹の髪を優しく撫で、豪炎寺は空いた手で胸元のペンダントを固く握りしめる。
そして真っ直ぐに円堂と染岡を見つめると、その場で頭を下げた。
「改めて頼む、俺を雷門中サッカー部に入れてくれないか」
「勿論！　歓迎するぜ、豪炎寺！」
一瞬の間も挟まず、円堂は即答しながら豪炎寺の肩を叩く。

顔を上げながら、豪炎寺は微笑んだ。
「ありがとう、円堂……」
「へっ。入部は構わねぇがな、『雷門の点取り屋』の称号を渡してやるつもりはねぇぜ？」
「あぁ、俺もお前に負けないよう努力するさ」
極悪な笑みを浮かべる染岡に豪炎寺は不敵な笑みを返す。
そんな２人を見ながら、円堂は堪らずといった様子で拳を突き上げた。
「よーし！　それじゃあ今から練習しようぜ！」
「い、今からか？　もう日が暮れちまうぞ？」
「だいじょーぶだって！　俺の秘密の特訓場があるからさ！　」
困惑する染岡と豪炎寺に構わず、そう言って　円堂は病室を出て行ってしまう。
それを見送りながら、染岡と豪炎寺は顔を見合わせて思わず噴き出した。
「アイツは……サッカーバカだな」
「あぁ、全くだぜ。おし、それじゃあ俺達も行くか！」
「――――あぁ」
２人も、円堂を追って病室を出ていく。
１人残された病室で、眠る少女の口元はいつの間にか静かに笑みを浮かべていた。

4．宍戸の悩み

帝国との試合から数日後、豪炎寺と染岡の活躍に充てられたように、雷門イレブンの面々は必殺技の特訓に明け暮れていた。

「必殺技もいいけどよ、お前ら基礎練習も怠るんじゃねえぞ。最終的にモノを言うのはやっぱり体力だからな」

練習に打ち込む後輩たちへ声を掛けてから、染岡は足元のボールを蹴り上げる。

それを胸でトラップしながら、風丸が周囲を見回しながら染岡へ声を掛けた。

「染岡、豪炎寺と円堂は？」

「豪炎寺なら用事があって遅れるってよ。円堂はマネージャーと冬海のトコだ」

「冬海か、そう言えばアイツ俺たちが帝国と引き分けたって聞いて青ざめてたらしいぜ」

風丸のパスを受け止め、リフティングしながら染岡は興味無さそうに相槌を打つ。

実際のところ、あんな小物に構っている暇は無いのだ。

染岡が本当に警戒しているのは、冬海の背後にいる影山である。

勝つためならバスへの細工や鉄骨落とし等を平気でするような外道だ、先日の試合で明確にこちらを脅威として認識している状態では何を仕掛けてくるか分かったもので

は無い。
下手をすれば、手段を選ばずこちらを直接始末しに来ることすら有り得るだろう。
それに世宇子中、エイリア学園。対策しなくてはならない存在は沢山ある。
特にエイリア学園との戦いでは最初に雷門イレブンの大半が負傷されられてしまうのだ、染岡としてはそれだけは回避したかった。
「どうした？　染岡、悩み事でもあるのか？」
「いいや、何でもねぇよ。……そうだ風丸、お前『疾風ダッシュ』を練習してみねえか？」
考え込む染岡の顔を風丸が不思議そうに覗き込む。
誤魔化すように染岡は話題を変えるが、その内容は魅力的だったらしく風丸は食い付いてきた。
「『疾風ダッシュ』って、お前が相撲部に使ってたアレか？」
「あぁ、お前のスピードは大したモンだしな。俺が教えられそうな技の中でで最大限に速さを活かせる技っつうとコレだ」
そのまま染岡は踏み込む時の足の角度や体勢のコツなどを教えていく。
ふと視線を感じて染岡が後ろを向くと、楽しそうな笑みを浮かべながらマックスが２人のやり取りを覗き込んでいた。
「へぇ～風丸だけ狡いなぁ～……おーい皆ー！　染岡が必殺技を教えてくれるってさ～

！」
「あっ！　マックス、お前！」
「本当でやんすか！」「本当っすか！」
悪戯っぽく笑いながらマックスが呼び掛けると、聞きつけた栗松達が染岡の元へ殺到する。
最初は困惑していた染岡も、帝国との試合まではやる気を失っていた後輩たちがここまで熱心に練習に取り組んでいるのが嬉しいのか、結局一人一人に必殺技の指導をしていく。
練習試合の段取りを終えて円堂達が戻って来た時には、それぞれの必殺技の練習に取り込む面々とその間でぐったりとしている染岡という構図が出来上がっていた。

「尾刈斗中？」
「あぁ、帝国との試合以来色んな所から練習試合の申し込みがあったんだけどさ。中でもここが1番熱心に申し込んできたんだってさ」
狭い部室の中で思い思いの場所に腰掛けながら、染岡たちは円堂の説明に耳を傾けていた。

聞き覚えのないということは、そこまでの強豪校では無いのだろう。
栗松たちがホッと胸を撫で下ろす中、染岡は朧気な記憶を必死で掘り起こしていた。
（尾刈斗……尾刈斗……ダメだ！　名前は思い出せてもどういう連中だったかは思い出せねぇ！）
元々頭脳労働が得意ではない染岡は早々に思い出すのを諦める。
少しでも情報を集めようと円堂へ視線を向けると、円堂もバツが悪そうに頬をかいた。
「実は尾刈斗中の情報が全然ないんだ！　試合のビデオとかも無いし、練習試合前に偵察なんて向こうも許してくれないし」
「情報ですか……ならばここは僕の出番のようですね！」
円堂の言葉に、どこから現れたのか目金が胸を張る。
「あっ！　帝国戦で逃げたくせに何いばってるでやんすか！」
「そうだそうだ！」
栗松の突っ込みに同調する宍戸。
目金は一瞬うぐっと怯んだものの、誤魔化すように咳払いするとその目元を覆うメガネをキラリと光らせた。
「フフ、僕はこう見えて情報集めが得意でしてね！」

「残念だがその役は間に合っているようだぞ」
目金の言葉を遮るように立て付けの悪い扉を開けて、豪炎寺が部室に入ってくる。
そして皆の中心に置かれた机へ持っていた丸めた紙を放り投げた。
「遅いぞ豪炎寺！　……で、コレなんだ？」
「昇降口に貼られていた新聞だ」
円堂が代表して紙を広げてみれば、そこには雷門中と尾刈斗中の試合が行われるという記事が載せられていた。
円堂達が顧問の冬海から対戦相手の旨を伝えられたのがつい先程の事だというのに。
「ええ!?　俺たちよりも先に尾刈斗中のことを知ってたヤツがいるのか？」
「そう言えば聞いたことあるでやんす！　俺達の学年にすごく耳の早い新聞部がいるって！　その人に頼めば尾刈斗中の事も調べられるんじゃないでやんすか？」
目金の事を完全に放置し、思い出したように両手を打ち合わせる栗松。
その言葉を聞いた豪炎寺は身を引くと、後方に待機させていた人物を部室の中に招き入れた。
眼鏡を額にかけた活発そうな少女が一礼して部室へ入ってくる。
「どうも円堂センパイ！　こないだの試合はお見事でした！　そちらの記事は読んでいただけましたか？　良く書けてるでしょう？」

元気良く挨拶をする少女。
円堂は手元の新聞と目の前の少女の顔を何度も見比べる。
「え？　ってことはこの記事を書いたのは……」
「はい、私です！　部員よりも早く情報を得るなんて中々でしょう？」
えへん！　と胸を張る少女に、栗松が「あ！」と声を出すと指を突きつけた。
「キャプテン、キャプテン！　さっき俺が言った新聞部の1年生ってきっとこの人でやんすよ！」
「あら？　どうやら私の事をご存知のようで。では改めて自己紹介を！　雷門中1年生、音無春奈！　雷門中サッカー部のマネージャー志望です！」

「呪いだってぇ!?」
音無から尾刈斗についての噂を聞いた円堂が思わず素っ頓狂な声を漏らす。
壁山が怯えている以外は、皆信じている様子はない。
音無はしかしそんな反応に構わず話を続けた。
「はい、尾刈斗と練習試合をした相手は試合中に突然足が動かなくなったとか、腹痛で倒れたとか、色んな原因で試合を棄権しているんです！」

「それって単なるウワサなんじゃないの？」
部室内に積まれた古タイヤの上に腰掛けていたマックスが揶揄うように笑う。
音無はそれにムッとした表情を浮かべた。
そんなやり取りを傍から眺めながら、壁に背中を預ける豪炎寺は隣の染岡へ尋ねる。
「……どう思う？　染岡」
「どうもこうも、呪いなんてねぇだろ……豪炎寺お前もしかして、ちょっと信じてるのか？」
「……」
染岡が苦笑混じりの視線を向けると豪炎寺はそっぽを向いてしまう。
最後はキャプテンの円堂が両手を打ち鳴らして締めた。
「呪いだろうと何だろうとどんな相手だって、皆で全力でぶつかれば絶対に勝てるさ！
よーし、そうと決まれば練習再開だ！」

「行くぞ、鬼道！　佐久間！」
「よし、今だ！」

帝国のサッカーコートでは、鬼道を中心とするサッカー部の面々が練習に励んでいた。

鬼道の掛け声に合わせて、源田が蹴ったボールへ向かって佐久間が跳躍する。

「鬼道さん！」

空中で体を前転させ、踵落としの形でボールを下へ蹴り落とす佐久間、その落下地点へ向けて鬼道が疾走した。

「おおおおおっ!!」

そのまま落下してきたボールへハイキック――――しかし直後、ボールは叩きつけられた鬼道の爪先を弾き返して、あらぬ方向へ吹き飛んだ。

「ぐあっ!?」

反動で吹き飛ばされた鬼道が人工芝を転がる。

慌てて駆け寄る源田と佐久間を手で制しながら、鬼道はヨロヨロと立ち上がった。

「タイミングがズレていたか……もう一度だ！」

ダメージに構わず、再び走り出す鬼道。

その背中を見ながら、佐久間が呟いた。

「あんなに必死な鬼道さんは初めてみるな……」

「あぁ。俺もアイツとの付き合いはそれなりに長いが……それ程までに雷門との試

合は応えたんだろう」
「それはお前もだろ、源田」
佐久間が源田の手に嵌められたグローブを強引に引き抜く。
その下から現れた手は、潰れた血豆や痣でボロボロになっていた。
バツが悪そうにしながら源田は自嘲するように笑う。
「……まぁな、だが次は負けん。帝国のゴールを預かる者として、キングオブゴールキーパーの名にかけて、豪炎寺と染岡を必ず止めてみせる！」
拳を握り締め、力強く誓う源田。
そこへ、鬼道がボールを催促して呼び掛ける。
「行くぞ、佐久間。まずはこの技を完成させるんだ。【デスゾーン】、そして【皇帝ペンギン２号】を越える俺達帝国の新たな技を……!!」

「行きますよキャプテン！　それっ!!」
宍戸が足元のボールを蹴りつける。
カーブを描いてゴールの隅につき刺さらんと迫ったそのシュートは、しかし円堂のパンチであっさりと弾かれた。

「よーし、宍戸！　もう1回だ！」
「は、はい！」
円堂が再びゴール前で身構える。
宍戸はそれを見届けると、再びゴールへ向けてシュートを放った。
今度は一直線に進んだそれは、円堂の手の中にあっさりと収められる。
「どうした、宍戸！　さっきよりもシュートが弱いぞ！」
「す、すいません！」
「宍戸！　力みすぎだ、もっとリラックスしろ！」
円堂とシュート練習に勤しむ宍戸へ、染岡は離れた場所から大声でアドバイスを送る。
「絶好調だな、染岡コーチ」
「よせよ、俺はコーチなんてガラじゃねえ」
風丸が揶揄うように笑いかけると、染岡は照れ隠しか苦笑いを浮かべる。
自分を含むチーム全員へ必殺技の指導をしながらどの口が言うのか、と内心ツッコミを入れながら風丸は【疾風ダッシュ】の練習へ取り組んだ。
「そこだ！　加速する直前で思い切り踏み込め！」
「ああ！」

走りながら、言われた通りに風丸は思い切り右足で踏み込む。
途端、体が風のように軽くなり――――気づけば、風丸は猛スピードでグラウンドを駆け抜けていた。
「できた！　出来ぞ、染岡！」
「あぁ、加速はバッチリだ。だが問題はここからだぜ？」
染岡は意地の悪い笑みを浮かべながら持っていたボールを風丸へ蹴り渡す。
「【疾風ダッシュ】ってのはドリブル技だ。お前にはドリブルをしながら今のスピードを出せるようになってもらうう」
「よし、任せろ！」
威勢よく答え、ドリブルをしながら加速していく風丸。
そして肝心の加速のタイミングで、ボールが踏み込む足に当たって弾かれてしまった。
「しまった！　……くそ、もう1回だ！」
「あぁ」
染岡は予備のボールを風丸へ蹴り渡す。
受け取って再び走り出すも、今度は踏み込む足に当たらないよう意識し過ぎたのか、加速が上手くいかずに終わった。

「上手くいかないな……」
「言っただろ？　基礎練習は怠るな……こないだまで陸上部だったお前にゃ酷だが……要するにボールの感覚を掴みきれてねぇんだよ」
「ボールの……感覚？」
ピンとこなかったのか、風丸が首を傾げる。
染岡はニッと笑うとタオルを自分の目元へ巻き付けた。
目隠しの状態になった染岡はそのまま足元のボールを蹴り上げると、その場でリフティングを始める。
「おうよ、それを掴めればこういうのも出来るようになる」
喋りながら器用にリフティングを続ける染岡。やがて一際高くボールを蹴り上げると、ゴールで豪炎寺とキャッチの練習をしている円堂へ向けてボレーシュートを放った。
「ん？　どわーっ!?」
不意に飛んできたシュートに円堂の悲鳴が響く。
それを尻目に目元のタオルを外した染岡は再度風丸へボールを渡した。
「1回目はお前はボールを意識できていなかった、2回目は逆に意識しすぎだ。いいか、ボールは目で見るもんじゃねぇ……心で感じるもんなんだ！」

「心で感じる……目で見る物じゃない……か」
足元のボールをじっと見つめる風丸。
やがて染岡を真似てタオルで目隠しをすると、ゆっくりとボールを蹴って歩き始めた。
「ボールを感じる……なるほどな、上手く言えないけど確かに分かるよ。この感覚を自分の物にすればいいんだな！」
よちよちと、拙い動きで少しずつ進んでいく風丸。
それを見ながら染岡は笑みを浮かべて頷いた。

「……あれ？　宍戸は？」
辺りも暗くなり練習を切り上げて部室で着替える中、円堂がふと呟いた。
染岡もそれに反応して部室内を見回すが、円堂の言う通り宍戸の姿だけが見当たらない。
「先に帰ったんじゃないのか？」
「いや、片付けの時ゴールでシュート練習してたのを見たぞ」
隣で自分のジャージをロッカーから取り出す風丸と、ユニフォームを脱ぎ掛けの豪炎

寺が会話に参加する。
それを聞いて染岡は脱ごうとしていたユニフォームを着直すと、ちょっと様子を見てくると言ってグラウンドへ向かった。
近くまでたどり着いた染岡は、そのガラの悪い両目を大きく見開く。
「……！　宍戸ォッ!!」
大声を出しながら染岡は駆け出す。
その視線の先にはゴール前で倒れ込む宍戸佐吉の姿があった。
「おい！　宍戸!!　おい!!」
「は……はれ……？　染岡さん……」
慌てて揺り起こすと、宍戸は困惑しながらも目を覚ます。
染岡はホッとしながらも、声を荒らげて宍戸を怒鳴りつけた。
「馬鹿野郎！　もうすぐ試合だってのに、倒れるまで練習する奴がいるか！」
染岡の怒声に宍戸は一瞬びくりと身を竦ませたが、次の瞬間歯を食いしばると染岡の襟を掴んだ。
「だって……！　俺、このままじゃダメなんですよ！　染岡さんは急に上手くなっちゃって、豪炎寺さんっていうストライカーも入ってきて……栗松も、壁山も……皆自分の必殺技を見つけ始めてる！　このままじゃ、俺だけ皆に置いてかれちゃうじゃ

ないですか！」

目元から涙を流しながら、宍戸は絞り出すように叫ぶ。

予想外の反応に染岡は面食らうが、やがてその脳裏にかつての記憶が蘇る。

豪炎寺に対抗してムキになる自分、そしてそれに対していつも不満を漏らしていた宍戸。

いつの間にか無くなっていた構図だったが、今の宍戸の叫びを聞いた染岡は腑に落ちたような感覚を覚えていた。

思えば染岡がサッカーへの情熱を無くして毎日部室で遊んで過ごしていた頃は、宍戸と良く連んでいた。

宍戸からすればそんな先輩が突然やる気を出し始めて鬱陶しかったのか、豪炎寺のサッカーに嫉妬して危機感を抱いていた染岡がなりふり構わなくなるにつれて、宍戸も染岡に対して突っかかるようになっていた。

あれは恐らく嫌悪感というより焦燥感からの物だったのだろう。詰まる所、染岡と宍戸が抱いていた感情は似たような物だったのだ。

「へっ……」

後輩に襟を掴まれているというのに、染岡は思わず笑みを零していた。本来の彼なら

ば、宍戸は今頃宙を舞っていたかもしれない。
「宍戸ォ……」
「ひぃっ!?」
染岡の出した低い声に、宍戸は自分がやっている事をようやく自覚したのか、顔を青ざめさせて飛び退いた。
しかし染岡は怒るどころか顔を綻ばせると、宍戸の腕を引いて立ち上がらせる。
「気持ちは分かるけどよ……それで体壊したら結局本末転倒だろうが。オラ！　今日の練習は終わりだ、着替えてさっさと行くぞ！」
「行くって……何処へですか？」
キョトンとする宍戸へ、染岡はニッと笑って見せた。
「決まってるだろうが。ラーメンだよ、ラーメン！」

「はいよ、ラーメン２人前だ」
「ありがとうございます。ひび……！」
雷々軒、かつてのイナズマイレブンメンバーであり、染岡達雷門中の監督を務めた響

木正剛の構えるラーメン屋である。
しかし現段階ではただのラーメン屋の親父であり、現雷門中とは何の関わりもない。
うっかり癖で響木監督と呼び掛けた染岡は、慌てて口を押える。隣の宍戸はその様子に首を傾げるが、響木は気にした様子も無く厨房内の椅子に腰掛けると新聞を広げた。
しばし無言でラーメンを啜る。
その内、沈黙に耐えきれなかったのか宍戸が口を開いた。
「俺……怖かったんです。皆、先に進んでるのに、俺だけ置いてかれちゃうような気がして」
「あぁ……」
それは染岡もかつて感じていた物だった。
自分と同じポジションでありながら、自分を遥かに上回る豪炎寺の加入、それによって皆自分を置いて豪炎寺と共に進んで行ってしまうのではないかという恐怖と焦燥。
しかし――――
「そんな事しねぇよ。俺たちはチームだ、1人2人増えたからって、仲間を捨てたりしねぇ」
染岡は宍戸の背中を優しく叩く。
「そんなに不安なら……お前はお前のサッカーを見つけろ！」

「俺の……？」
顔を上げる宍戸に、染岡は力強く頷いてみせる。
それは、かつて豪炎寺へ対抗心を燃やす余り空回りする染岡へ円堂が送った言葉だった。
「そうだ。俺でも、豪炎寺でも、円堂でもねぇ…お前のサッカーを見つけるんだ。他の誰でもねぇ、宍戸佐吉だけのサッカーを！」
「俺の……俺だけのサッカー……？」
「ああ、他の奴なんて気にする必要はねぇ。お前は――――宍戸佐吉っつう、俺たちの仲間なんだからな」
呆然としながら染岡の言葉を聞いていた宍戸、その表情が見る見るうちに明るくなった。
「染岡さん――――分かりました！俺……見つけてやりますよ！俺自身のサッカーを！」
元気よく返事をする宍戸、それに染岡は笑みを浮かべて応えた。
「お前ら、雷門中か」
不意に、新聞を読んでいた響木が顔を上げる。
染岡が肯定すると、響木はその髭を生やした口元にどこか懐かしむような笑みを浮かべて見せた。

しかしそれを直ぐに消して、それきり口を開くことも無く響木は新聞へと顔を戻してしまう。

（俺は何にもしないぜ、円堂。この人を説得するのはお前の役目だからな）

完食したラーメンの丼を置いて、染岡は不敵な笑みを浮かべる。

その後、染岡と宍戸が退店するまで響木が新聞から顔を上げることは無かった。

5．VS尾刈斗

『さぁ――!!　いよいよ始まります！　あの帝国学園を相手に素晴らしい戦いを見せた雷門中と、倒した相手を呪うと噂の尾刈斗中の練習試合、まもなくキックオフです!!』

雷門イレブンと尾刈斗イレブンが対面して整列する中、お手製の実況テーブルで角馬圭太が声を張り上げる。

尾刈斗イレブンのまるで怪談や伝承がそのまま抜け出てきたかのような風貌に小心者の壁山はやや飲まれ気味だ。

「本日はお招き頂きありがとうございます」

「いえ、こちらこそ……」

ベンチではお互いの監督同士が挨拶を交わしていた。

ペコペコと頭を下げる冬海を見ながら、風丸は冷めた目で鼻を鳴らす。

「ふん、こんな時だけ監督ヅラして……」

「放っとけよ、あんな奴。それよりも試合に集中だ」

ぼやく風丸を窘めながら、染岡は円堂を握手を交わす目隠しをした相手チームのキャプテンを一瞥する。

目の意匠をあしらったバンダナで両目を覆う少年、幽谷博之。
ニヤニヤと嫌らしい笑みを浮かべながら、円堂と握手を交わしている彼を染岡はじっと見つめている。
やがて苛立ったようにその刈り上げられたピンク色の髪を乱雑に掻きむしった。
（ダメだ！　やっぱ思い出せねぇ……）
なんとなく見覚えはあるものの、結局染岡が尾刈斗との試合内容を思い出すことは出来なかった。
気を切りかえて、試合へ向けて意識を集中する。
理事長の娘である雷門夏未によれば、この試合の結果によって雷門中が中学サッカーの祭典フットボールフロンティアに出場できるかどうか決まるのだ。迂闊な試合展開は許されない。

尾刈斗ボールで試合が始まる。
ＦＷの月村からボールを受けた幽谷は、そのままドリブルで雷門ゴールへ切り込んだ。
「させないよ！」

すかさず止めに入ったマックスがボールを奪う。
予想よりも動きが速かったのか、幽谷はあっさりとボールを奪われてしまった。
「染岡！」
そのままマックスはパスを出す。それを受けた染岡は猛然と尾刈斗ゴールへ向けて駆け出した。
「まずい、止めるのです！」
焦りながらベンチで尾刈斗の監督　地木流が叫ぶ。
しかし帝国ＤＦすら止めきれなかった染岡を止める術などある訳もなく、数秒後には尾刈斗中のゴールネットにボールが突き刺さっていた。
『ゴ――――ール!!　雷門中のストライカー染岡！　早くも一点を決めた――――!!』
１―０
角馬の実況が響き、観戦していた観客達から歓声が上がる。
試合再開のホイッスルが鳴り響くと同時に、今度は尾刈斗の武羅渡がドリブルで駆け上がった。
「行かせないよ……」
影野がボールを奪おうと武羅渡へ迫る。
武羅渡はそちらをチラリと見ると、上がってきた幽谷へパスを出した。

「止めてみなよ！　【ファントムシュート】！」
ダイレクトで幽谷が蹴りつけたボールは、無数の火の玉となって円堂が守るゴールへ迫る。
「入れさせるか！　【ゴッドハンド】!!」
幽谷の必殺シュートは円堂によってあっさりと止められる。
しかしそれを目の当たりにした尾刈斗の面々に悔しがる様子はない。
むしろこのくらい当然、とでも言うような態度だ。
（なんだ……？）
それを見て円堂は疑問を抱く、が考えても答えは出ない。
「風丸！」
「おう！」
ＤＦの風丸へボールを投げ渡す、その瞬間、尾刈斗キャプテンの幽谷が叫んだ。
「監督！　アレを使います！」
「いいでしょう……」
監督の地木流が頷く。
そして前髪をかきあげた途端、それまでの紳士的な態度を豹変させた。
「ひゃーははは！　その目に焼き付けろ雷門！　これが我々の必殺タクティクスだ！」

「必殺タクティクス？」
聞きなれない言葉と相手の監督の変化に風丸が思わず足を止める。
直後、フィールド中央に集結した尾刈斗のＦＷとＭＦが奇妙な動きで両手を動かし始めた。
「あぁ？　何してやがるこいつら……」
怪訝そうな顔でそれを眺める染岡、その瞬間、ようやくかつての試合の内容が記憶に蘇る。
「まずっ……」
「もう遅い！　必殺タクティクス!!　【ゴーストロック】!!」
高らかに叫ぶ幽谷。
直後、雷門イレブンの全員が一斉に動きを止めた。
「何……？　皆どうしたの!?」
ベンチで試合を見守っていた木野が困惑しながら呼び掛ける。
１番近くの栗松が慌てた様子でその声に応えた。
「う、動かないでやんすよ！　足が全く動かないでやんす！」
「ええ!?」
その返答に驚いてフィールドを見回せば、雷門イレブンは皆揃って足の裏が地面に張

り付いてしまったかのように藻掻いていた。
染岡と豪炎寺ですら、無理やり足を動かそうと奮闘している。
「くくく……」
そんな中、風丸の足元からボールを掠めとった幽谷はそのまま雷門ゴールまで駆け上がっていく。
「不味い、円堂――――!!」
叫びながら風丸が視線を向ければ、円堂も両足が動かせ無くなっているのが見えた。
「喰らえ【ファントムシュート】！」
先程と同じシュート、しかし今度はしっかりとゴールネットが揺らされた。
『ゴ――――ール!!　なんと雷門中が全員動きを止める中、尾刈斗幽谷がゴールを決めた――――!!』
1―1
円堂の目の前に転がるボールを、全員が呆然と眺める。
豪炎寺さえも苦虫を噛み潰したような顔で立ち尽くす中、染岡だけが頭をかきあげながら考え込んでいた。
（【ゴーストロック】……！　確か豪炎寺が破った技だよな……問題はどうやって破ったか、だが……）

肝心な所が思い出せない。
悩み込む染岡を待つことなく、試合が再開する。
「くっ……染岡！　あの技を使われる前に速攻を掛けるぞ！」
「お、おお！　任せろ！」
豪炎寺と染岡のパス回しに翻弄され、尾刈斗はあっさりとＤＦラインまでの侵入を許す。
「ちっ……！」
ゴール前で染岡へパスを出そうとした豪炎寺は、尾刈斗ＤＦ陣が全員がかりで染岡をマークするのを見て舌打ちした。
そして頭上へボールを蹴り上げると自らも炎を纏いながら空中へ駆け上がる。
「【ファイアトルネード】!!」
豪炎寺の必殺シュート。尾刈斗ゴールを守るジェイソンマスクのＧＫ　鉈は先程の幽谷達のように両手を妖しく動かす。
「【歪む空間】！」
ゴールへ向けて一直線へ進むボール、それは突然勢いを失ったかと思うと、吸い込まれるように鉈の両手の中へ収められた。
『と、止めた――――――!!　尾刈斗ＧＫ鉈！　帝国のゴールすら奪った豪炎寺の必殺

シュートを止めてみせた――――!!!』
実況の角馬の興奮した声が響く。
完全に止められたボールを、豪炎寺は信じられないといった様子で見つめていた。
結局その後、雷門中は尾刈斗の必殺タクティクスに翻弄され続けた。
突破口すら見つからないまま、幽谷の必殺シュートでもう一点を奪われ前半を終えたのである。

「染岡」
雷門中の全員が沈んだ表情で休憩をとる中、水分補給していた染岡の元へ豪炎寺がやってくる。
「どうした？」
「お前に聞きたい、あのキーパー……どう思う？」
豪炎寺がちらりと視線を向ける先には、尾刈斗のＧＫの姿があった。
「……そうだな、言わせて貰えば……帝国の源田程の実力があるとは思えねぇ」
「だが、現に俺のファイアトルネードは止められた」
帝国との練習試合で源田の【パワーシールド】を打ち破ったファイアトルネードがこ

うもあっさりと止められた事実に、豪炎寺自身も困惑しているようだ。
「何かタネがあるんじゃねえか？　例えばあの手の動きとか――――――あ！」
そこまで言ったところで染岡は漸くかつての尾刈斗戦の記憶を完全に思い出す。
そしてそこまで聞いた豪炎寺もピンときたのか、少し驚いたような表情で染岡を見つめた。
「暗示、催眠術の類か……」
「タネさえ思い出せ……分かればこっちのもんだな」
豪炎寺と染岡はニヤリと笑みを浮かべながら尾刈斗のベンチを一瞥する。

雷門　　尾刈斗
1　　2
後半戦、開始。

「行くぞ、皆！」
円堂が両拳を打ち合わせながら叫ぶ。
しかし壁山や栗松は落ち込んだ様子で返事をしない。

風丸やマックスも返事はしたもののその勢いは明らかに弱かった。
「相当効いてるなアイツら」
「原理が分からないんじゃ、対策のしようもないよね！」
雷門ボールでのキックオフ、それと同時に月村と幽谷がボールを持つ豪炎寺へ襲いかかる。
「渡すか！　うおおおおお!!」
豪炎寺が雄叫びをあげる、それと同時にその全身を燃え盛る炎が包み込んだ。
「【ヒートタックル】！」
「なに!?　うわぁぁぁっ!?」
炎のタックルで2人まとめて吹き飛ばし、豪炎寺はそのまま尾刈斗ゴールへと攻め込む。
「豪炎寺修也はいい、染岡竜吾だけは封じるのです！」
「「おお！」」
地木流の指示で動いた尾刈斗ＤＦ陣が染岡を取り囲む。
それによってノーマークとなった豪炎寺はそのままゴール前へ到達した。
先程の技に余程の自信があるのか、そんな状況でも鉈は慌てる素振りすら見せない。
「【ファイアトルネード】！」

炎を纏いながら飛び上がった豪炎寺が、空中のボールを蹴りつけようとする。
それを見た鉈は再び両手を激しく動かした。
「【歪む空間】！」
「今だ！　染岡!!」
その瞬間、豪炎寺は体をさらに半回転させるとゴールではなく後方で尾刈斗ＤＦに包囲される染岡へ向けてシュートを放つ。
「待ってたぜ、豪炎寺！」
ＤＦに囲まれる中、ずっと目を閉じていた染岡は豪炎寺の声に反応して開眼する。
そしてそのまま体を捻りながら真上へ跳躍した。
「うおおおらァ!!　【ドラゴンキャノン】!!」
後ろ回し蹴りがボールへ叩き込まれ、赤い竜の幻影と共に尾刈斗ゴールへ迫る。
再び必殺技を使う間もなく、染岡のシュートはゴールネットへ突き刺さった。
『ゴ――――ール!!　雷門ストライカー、染岡竜吾が２点目を決めた――――!!!』
２―２
「もう一度行くぞ」
「ああ、次は【ゴーストロック】も来るぞ」
ハイタッチを交わしながら、豪炎寺と染岡は尾刈斗イレブンの様子を伺う。

【歪む空間】が破られた事に慄いているのか、幽谷達からは先程までの余裕は失われていた。
　恐らく次は出し惜しみはしないで攻めてくる筈だ。
「ま、マグレだ、行くぞ！　【ゴーストロック】!!」
　キックオフと同時にフィールド中央に集結した尾刈斗メンバーが妖しい手の動きを始める。
　それを目にした瞬間、豪炎寺が叫んだ。
「全員、目を閉じろ！」
「豪炎寺!?」
　サッカー中にあるまじき指示に円堂や風丸は戸惑いを隠せない。
　豪炎寺はそれを見てもう一度叫ぶ。
「奴らの手を見るな！　前半の金縛りの原因は……あの手の動きによる催眠術だ！」
【ゴーストロック】の原理、豪炎寺の指摘が図星だったのか、尾刈斗の面々に明らかな動揺が走る。
　しかし雷門側も困惑を隠せない。
「み、見るなって……ボール持ってる相手を見ないでどうやって守るっすか!?」
「そうでやんす！　見ないでサッカーするなんて無茶でやんす！」

騒ぐ壁山と栗松。その隣で風丸は顎に手をやり考え込んでいた。
（見ないで守る……ボールを見ないで……そうか!!）
「くっ……タネが分かったからってなんだ！　【ゴーストロック】がある限りお前たちは俺たちの方を見れないんだ！」
幽谷が身動きの取れない雷門メンバーの間を縫って勢いよく雷門ゴールへ攻め込む。
しかしそれを目を閉じたままの風丸が阻んだ。
「！　こいつ、目を閉じたまま……」
「ボールの感覚を掴む……！　そこだ!!」
疾風の如く加速した風丸が幽谷の足元からボールを掠め盗る。
呆気に取られる幽谷をよそに、風丸はそのスピードを保ったまま尾刈斗ゴールへと駆け上がった。
「これだ……！　これが染岡の言っていた事か！」
「行かせるか！」
尾刈斗メンバーが周囲を囲む。
しかし風丸はそれを何の意にも介さず、まさに疾風の如く一瞬で全員を抜き去ってみせた。
「これが俺の……【疾風ダッシュ】だ！　行け、豪炎寺！」

そのまま、豪炎寺へパスが出される。
それを受け取った豪炎寺は向かってくる尾刈斗ＤＦをあっさりと抜いて一対一で鉈と対峙した。
「行くぞ！　【ファイアトルネード】！」
「くっ……！　調子に乗るな……【キラーブレード】！」
豪炎寺が炎を纏いながら空中へ飛び上がる。
対する鉈は右手にエネルギーの刃を形成し、身構えた。
炎のシュートへ鉈のキラーブレードが振り下ろされる。
一瞬の拮抗。だが次の瞬間、鉈の刃は粉々に粉砕されていた。
『ゴ――――――――ール!!　雷門中、染岡と豪炎寺の連続ゴールで一気に逆転だ――――――!!』
「ば、馬鹿な……雷門中は染岡竜吾と豪炎寺修也以外は雑魚の集まりの筈では……」
得点板に刻まれた数字を見ながら、尾刈斗の監督は前髪をかきあげながらワナワナと身を震わせる。
「ふざけるなァァァァァッ!!　テメェら！　雷門の連中に地獄を見せてやれ!!」
「言われなくても……このままじゃ終われない！」
監督の声援（？）を背中に受けながら、幽谷は月村と武羅渡との連携で雷門ＤＦを突

破していく。
「うおおおおおおおお！　【ファントムシュート改】！」
月村からのパスを受けた幽谷は、そのままダイレクトでボレーシュートを放つ。
無数の火の玉へ分裂したボールは、先程よりも速いスピードで円堂が守るゴールへ襲いかかった。
（速い！　ゴッドハンドじゃ間に合わない！　なら……これだ！）
円堂の拳が炎を纏う。
迫り来る火の玉が眼前で一つになった瞬間、円堂はそこへ炎の拳を叩きつけた。
「【熱血パンチ】！　だぁぁぁぁっ！」
「なっ……新技?!」
拮抗した後、円堂の拳がファントムシュートを突き破りボールを弾き飛ばす。
零れたボールを拾い上げた栗松はそのまま前線へと大きくパスを出した。
「染岡さん！」
「おお！」
ＤＦの包囲を大跳躍で抜け出し、空中でパスを受け取った染岡はそのまま豪炎寺へ向けてボールを蹴り込む。
「豪炎寺ィッ!!　合わせろ！　【ドラゴンズテイル】！」

龍の尾のようにしなる染岡の足がボールを激しく蹴り付ける。
豪炎寺は頷くとタイミングを合わせながら炎を纏って飛び上がった。
「【ファイアトルネード】！」
シュートチェインによって威力が倍増したシュートが尾刈斗ゴールへ迫る。
その迫力に鉈は思わず身を逸らしてしまい、ボールは何の障害もなくゴールネットへ突き刺さった。
同時にホイッスルが鳴り響く。
『ゴ――――――――ール!!　最後は染岡と豪炎寺の連携シュートで決めた――――ー!!
4―2で雷門の勝利だ――――――――!!!!　』
「僕達が……負けた」
呆然とする幽谷、そこへ円堂が駆け寄った。
円堂の顔を見た幽谷は悔しげに歯を食いしばると、雷門中イレブンへ指を突きつける。
「円堂守……今度やる時は、絶対に勝ってみせる！　見ていろ雷門、次に戦う時はフットボールフロンティアだ！」
「ああ！　絶対にまたやろうぜ！」
円堂と幽谷がキャプテン同士固い握手を交わす。

お互いのチームが健闘を称え合う中、雷門の監督である冬海だけは忌々しげにその光景を見つめていた。
そして近くの木陰を一瞥する。
「へーぇ、アレが雷門中か」
木陰から試合を眺めていた青髪の長身痩躯の少年が冬海と視線を交わすと、口元に笑みを浮かべながらフィールドへ背を向けた。
「分かっていますね、君の役割は……」
「はいはい……染岡竜吾に豪炎寺修也、円堂守……ねえ。ま、精々頑張ってもらおうかな 」
頭の後ろで手を組みながら、少年は鼻歌交じりでグラウンドから歩き去る。
その後ろ姿を見つめながら、冬海は額の汗をハンカチで拭いつつどこかへ電話を掛けるのだった。

6．　秘伝書

「フットボールフロンティアだぁーーーーー!!」
「「おおーーー!!」」
「絶対に勝つぞーーーーー!!」
「「おおーーー!!」」
部室の中央に立つ円堂の呼び掛けに合わせて、栗松達が声を張りながら拳を突き上げる。
尾刈斗との試合に勝利した事でフットボールフロンティアへの参加権を手にしたことで、連日この調子である。
風丸や豪炎寺、それに染岡といった比較的冷静な面子はその様子を苦笑混じりに眺めていた。
「いつまでやってるんだアイツら……」
「まあ、喜ぶ気持ちは分からなくも無いけどな」
「貴方達、何やってるのよ……」
呆れ顔で入ってきたのはこの雷門中の理事長の代理であり、その娘である雷門夏未

だ。
　サッカー部を嫌っており度々廃部にしようとしてきた人物だが、染岡の知る未来ではその嫌いなサッカー部のキャプテンである円堂と結ばれているのだから恋心とは複雑怪奇である。
「お、夏未！約束どおり、俺たちフットボールフロンティアに出れるんだよな！」
「ええ、勿論。約束は守るわ。でも1回戦敗退なんて惨めな結果は許さないわよ」
「わーかってるって！」
　グッとサムズアップしながら、満面の笑みを浮かべる円堂。
　それに冷めた表情を返しながら、雷門夏未はヒラヒラと手を振って部室を出ていってしまった。
「……何しに来たんだ？アイツ」
「大会頑張れ……って感じじゃないよな？」
　豪炎寺と風丸が不思議そうに首を傾げる。
　そこへ、夏未と入れ替わりで冬海が部室へ入ってきた。
「円堂くん、入部希望者を連れてきたのですが」
「え!?冬海先生！本当ですか!?」
　冬海の言葉に円堂が思わず詰め寄る。

その勢いに押されながら、冬海は部室の外の人物を招き入れた。
青髪の長身痩躯の少年がウィンクしながら挨拶する。
「チーっス、俺、土門飛鳥。ＤＦ志望でヨロシク」
「おおーー!俺、円堂守!!一緒にフットボールフロンティア優勝目指して頑張ろーぜ!!」
軽薄そうな態度の土門の手を取り、ブンブンと振り回す円堂。
されるがままの土門を庇うように割って入った冬海は「転校の手続がある」と告げると彼を連れて部室を出ていってしまった。
「あ、そうそう……1回戦の相手が決まりましたよ。相手は野生中という所だそうです」
去り際にそう言い残すと、冬海は部室のドアを閉めて行ってしまう。
「野生中?聞いたことないな……」
「去年の地区予選準優勝校だ」
首を傾げる円堂へ豪炎寺が告げる。
それを聞いた円堂がええ!?と思わず声を上げた。
「って事は地区予選じゃ帝国の次に強いってことか!?」
「そうは限らねぇだろ。俺たちみたいに今年からってチームもあるし、去年より強くなってるチームだってある筈だぜ」

円堂の言葉を窘めながら、染岡は何か情報はないか？と豪炎寺を一瞥する。
顎に手をやり考え込む豪炎寺、やがてその口が開かれる瞬間、部室のドアが勢い良く開いて音無が飛び込んできた。
「ハイハイハーーイ！野生中の情報はバッチリですよー!!」
「音無！」
手帳を開いた音無はそこに記された野生中の情報を読み上げていく。
「野生中は自然に囲まれた環境が特徴の学校で、サッカー部も高い身体能力が持ち味のチームになってます！そしてなんと言っても……」
「奴らは空中戦が強い。帝国でさえも奴らとの試合では空中戦は挑まなかった程だ」
先程の意趣返しと言わんばかりに、豪炎寺が音無の台詞を奪う。
頬を膨らませて抗議の視線を向ける音無へ澄まし顔で返しながら、豪炎寺は話を続けた。
「俺の【ファイアトルネード】は正直言ってアイツらとは相性が悪い。染岡なら破れる筈だが、尾刈斗戦みたいに徹底マークされればこっちはかなり分が悪いな」
「確かに……2人がダメなら得点できないでやんす」
栗松が落ち込んだように肩を落とす。
それを見た壁山も眉を八の字にして溜息をついた。

「……帝国と引き分けたのも尾刈斗に勝てたのも……染岡さんと豪炎寺さんがいたからっす。その2人が通用しないんじゃ……」
「馬鹿野郎！やる前から諦める奴がいるか！」
落ち込む部室の空気を打ち破るように、染岡が一喝する。
そして丸まる壁山の背中を思い切り叩いた。
「連中が空中戦が得意だっつぅなら、こっちはそれよりも高い所からシュートを打ち込んでやりゃあいいんだろうが！」
「でもそんなのどうやってやるっすか……」
「それを皆で考えんだよ！」
自身が知る事は口にせず、後輩たちを励ますように染岡は声を張る。
聞いていた円堂は頷くと拳を頭上へ突き上げた。
「染岡の言う通り！よし、今日の練習は野生中対策だ！」

「くぅーーー！やっぱ練習後のラーメンは美味いぜ！」
「しかし高い位置からのシュートか……中々上手くいかないな」

円堂、風丸、豪炎寺、染岡の４人が雷々軒のカウンターに並んでラーメンを啜る。
響木は相変わらずラーメンを提供した後はカウンターの内側で新聞を広げていた。
「円堂、確かゴッドハンドはお前の爺さんのノートにあった技なんだよな？他の技とかは無いのか？」
風丸が隣で丼を傾ける円堂へ尋ねる。
その言葉に引っかかったのか、響木は新聞から顔を上げると円堂をジッと見つめた。
スープを飲み干し、視線に気がついた円堂はどう反応していいのか分からないのかアタフタしている。
「ゴッドハンド……それにそのバンダナ……おい、お前……名前は？」
「え？円堂……円堂守だけど」
円堂、その名を耳にした瞬間響木はサングラスの奥の目を大きく丸くした。
そして次の瞬間、大口を開けて笑い出す。
「そうか、そうか！お前、大介さんの孫か！」
「え!?おじさん、爺ちゃんの事知ってるのか!?」
思いもよらない反応に、円堂は目を輝かせながらカウンターに身を乗り出す。
その目と鼻の先にお玉を突きつけて、響木はニィと笑ってみせた。
「大介さんは色んな技を秘伝書として残していた。例えばお前の持っているという

【ゴッドハンド】のノートもその1つだ」
「秘伝書……!?」
「今も雷門中には大介さんの秘伝書がある筈だ。お前たちの求める物もその中にある……だが覚えておけよ、大介さんの秘伝書は、いつかお前たちに災いを呼ぶぞ」
災いを呼ぶ、響木のその物言いに豪炎寺と風丸が眉を顰める。
しかし円堂はそれを気にする様子もなく、はしゃいだ様子で豪炎寺達の背中を叩いた。
「よーーし!そうと決まれば明日から秘伝書探しだ!おじさん!ご馳走様!」
代金をカウンターに置くと、円堂はそのまま店を飛び出して行ってしまう。
呆れ顔でそれを見送った風丸と豪炎寺は、ヒソヒソ声で話し始めた。
「……どう思う?」
「……なんとも言えん。そもそもなんでラーメン屋のオヤジが円堂の爺さんのノートについて知ってるんだ?」
風丸と豪炎寺が疑うような目をカウンターの中へ向ける。
響木は円堂を見送ると再び新聞を広げてしまっていた。
そこへラーメンのスープを飲み干した染岡が話に参加する。
「考えたって仕方ねぇだろ、俺らだけじゃ限界もあるし真偽は兎も角、試してみる価値は

あるじゃねえか」
「染岡……そうだな」
その言葉に風丸と豪炎寺は頷く。
染岡はニッと笑いかけると響木へ声を掛けた。
「それじゃあ響木さん、ありがとうございました」
「……」
ラーメンの代金をカウンターへ置く染岡、豪炎寺と風丸も真似てカウンターへ自分の代金を置いた。
響木は染岡に名前を呼ばれた瞬間、1度だけピクリと反応したがそれきり口を開くことは無かった。

「……で、その秘伝書を探すって？」
今日が練習初参加である土門は、雷門中の理事長室の前に屯するサッカー部の面々を眺め回して呆れ顔を見せた。
本人たちは物陰に身を隠しているつもりなのだろうが、如何せん人数が多すぎて全く

隠せていない。壁山に至っては隠れる気すら無いようだ。
「もしかして、いつもこんな感じ？」
「まさか。今日だけだろ」
不安そうにする土門に返しながら、風丸も呆れ顔で円堂を眺める。
「……よし、理事長はいないみたいだ。他の所は探し尽くしたし、後はここだけだ！今のうちに行くぞ！」
円堂が素早くドアを開けて、理事長室の内側へ身を滑り込ませる。
栗松や宍戸がそれに続く。
続いてそれを真似をした壁山が飛び込むとドア枠にその巨体を詰まらせてしまった。
「う、動けないっす～！助けて～！」
「何やってんだバカ、そぉら！」
見かねた染岡が足をばたつかせる壁山の尻へタックルする。
超次元サッカーの現役プロのフィジカルを宿す染岡の肉体から放たれたタックルは、中学生離れした体格の壁山を軽々と吹き飛ばした。
ただし、嵌っていたドア枠ごとだ。
「……」
「「……」」

円堂達も、破壊した張本人の染岡も絶句しながら引っこ抜かれたドア枠の跡を眺める。

壁山だけが腹を金属製の長方形にはめ込んだまま、臀部をさすりつつよろよろと立ち上がった。

「あいたたた……酷いっすよ染岡さん！手加減くらいしてくれても……」

呑気に抗議する壁山を他所に、染岡達は顔を青ざめさせる。

ドア枠が破壊された余波で、理事長室の装飾が施された綺麗な壁には無残な亀裂が走っていた。

「お、おい、染岡……」

「ああ、やべぇな……」

ダラダラと嫌な汗を流す染岡、直後その表情が凍りつく。

「本当に何やってるのよ貴方達……」

廊下に立ち塞がる理事長室の主、雷門夏未は心底呆れた表情でサッカー部の面々を見回していた。

「この壁の損傷……修繕費は壁山君と染岡君の２人で割ってもかなりの額になるわね」

壁の損傷部を撫でながら発せられた夏美の言葉に染岡と壁山は顔を青くした。
プロとして活躍していた時なら兎も角、今の自分はごく一般家庭の中学生。壁山も同様だ。
富豪の夏美ですら「かなりの金額」と表現する程の額をポンと用意できるとはとても思えない。
「夏美、壁を壊したのは謝る！何とかならないか？」
懇願する円堂、それに続くように栗松達や、風丸も夏美へ頭を下げる。
はぁ、とため息をついた夏美は腕を組んで彼らを見回した。
「……いいでしょう、修繕費については不問とします。生徒を路頭に迷わせるのは私としても不本意だもの」
「本当っすか!?よ、良かったっす～「ただし！」!?」
安堵の息を漏らす壁山へ、夏美がビシッと指を突きつける。
「フットボールフロンティアで必ず優勝する事。もし負けたりしたら請求書が貴方達の自宅に届く事になるわよ。それにサッカー部も廃部にするわ」
「望むところだ！やったな、壁山！染岡！」
壁山と夏美の間に割り込んだ円堂がニッと笑う。
安堵の息をつく染岡とは対照的に、壁山は不安そうに目を伏せた。

「……それで、貴方達ここに何しに来たの？まさかドアを壊しに来ただけってわけじゃないわよね？」
「あ、そうだ！夏美！俺のじいちゃんの秘伝書って何か知らないか!?それを探しにここへ来たんだ」
秘伝書？と夏美が首を傾げる。そして何か思い出したように理事長室へ入ると窓際に置かれた机の引き出しから1冊のノートを取り出した。
「もしかしてこれの事かしら？理事長室の金庫の中にあったものだけど、秘伝書というよりは子供の落書きノートよ？てっきりお父様の私物かと……」
「それ、それだ！本当にあったのか！」
ノートを受け取った円堂は内容を確認して狂喜乱舞する。
パラパラとめくっていき、やがてとあるページを皆へ見せつけた。
「これだ！雷々軒のおじさんが言ってたのは！【イナズマ落とし】！」
そこに書かれていたのは乱雑に引かれた線と、踏まれてのたうち回る死にかけのミミズのようにぐちゃぐちゃに乱れた文字のような何かだった。
「……何だ、これは」
クールな豪炎寺でさえも、困惑を隠しきれない。
とても常人には解読不能な内容に、皆困惑する。

「ほら、言ったでしょう？子供の落書きノートみたいだって」
「？何言ってるんだ？読めるだろ。ほらココに【イナズマ落とし】って書いてあるじゃないか」
　キョトンとしながら言う円堂に全員が目を剥く。
　円堂が指し示す辺りにはやはり死にかけのミミズのようにぐにゃぐにゃした線しか書かれていなかった。
「なんていうか……凄い字だな」
「円堂だけにしか読み解けない暗号って訳か……もし他校のスパイがいてもこれなら安心だな」
　冗談めかして言う風丸。その言葉に土門がビクリと体を震わせるのを染岡は見逃さなかった。
（やっぱし警戒はされてるか……）
　土門は元々帝国学園から雷門中へ派遣されたスパイである。
　染岡の知る過去では最終的に雷門中を守る為に同じスパイである顧問の冬海を告発し、正式に雷門イレブンの仲間となったのだが……
（影山も俺たちの事は前以上に警戒してるだろうしな、下手したら土門が裏切れねぇように何か手を打ってるかもしれねぇ。……いざとなったら俺がやるしかねぇか）

一人静かに決意する染岡を他所に、夏美を含む他の皆は円堂の持つ秘伝書に見入っていた。
「それで、その【イナズマ落とし】はどうやってやるんだ？」
「ええっと……まず1人がピョンと跳ぶ！もう1人がその上でバーンってなって、クルッてなって、そしてズバーン！だ」
「「「……」」」
円堂の口から飛び出てきた説明に全員思わず黙り込む。
文字も超次元なら内容も超次元だ。
呆れを隠しきれず、風丸がポンと円堂の肩を叩いた。
「円堂……お前のじいさん、国語の成績良かったのか？」
「いやあ、サッカー一筋な人だったらしいし……」
苦笑いを浮かべる円堂は、誤魔化すように兎に角！と声を張り上げた。
「この技を完成させれば野生中が相手でも点を決める筈だ！よーし、特訓だ！」
「特訓って……今の説明でどんな特訓をするでやんすか!?」
「全力でやれば、きっと何かが見つかるさ！行くぞ!!」
栗松の肩を掴んだ円堂は、そのまま栗松ごと部室を飛び出していってしまう。
目を丸くしたまま顔を見合わせた染岡と豪炎寺は、やがて小さく噴き出すと唖然とし

ている皆を連れて円堂の後を追いかけるのだった。